

第139図 藤川祐作氏型式設定の矢穴古Aタイプ拓影集成【藤川 1998・2005を改変・編成】

た藤川祐作氏の試案は卓見の一語に尽きるといえよう。ただし、A タイプとの系譜関係について、直ちに石材技術者同士が直結するものと考える早計は、両者の比較検討の十分でない現時点では必要なく、氏も最近発言しているように〔藤川 2005〕、A タイプとの先後の因果関係を直接連想させる現在の型式名称を含め、矢穴の型式編年研究の大綱の形成と体系化の中で今後よく吟味する余地があるだろう。代案としては、「先 A」でもよい。

本調査地点および岩ヶ平刻印群全般に潜在する可能性のある矢穴古 A タイプの実態を把握するため、報告者が検討を加えた実例は、藤川氏の導き案内による神戸市東灘区小林墓地所在定印阿弥陀仏例、神戸市灘区所在北向地蔵正面例、同背面例（第 139 図）、神戸市灘区摩耶小学校西所在空觀堂定印阿弥陀仏例、神戸市灘区所在六甲八幡神社境内流しなどであり（第 18～21 図参照）、いずれも明確な A タイプ先行型の矢穴を実見し得ている。まだ資料数の少ない古 A タイプにも、A タイプ同様、いくつかの細分型式がみられることが警視した程度の現段階でも予想されるが、それとは別に、新型式策定の試みで重要なことは、次の 3 点ではなかろうか。

(ア) 上限が 13 世紀代にあって、時間的変遷が数百年の長期にわたること、(イ) 中世段階の城郭石垣築造時期とも時間的にオーバーラップがみられること、(ウ) 16 世紀末～17 世紀初頭前後の矢穴 A タイプ出現とともにあたかも交替するかのように、突如消え去る状況にあること。

(ア) については、石造品の長い研究蓄積の中から矢穴出現問題の一部に言及する古川久雄氏の高論が存在するが、ここではその出現問題や変遷、石造物造立と中世石工集団のとらえ方など直接城郭の調査・研究と離れるがため、あえて触れない。(イ) については、農臣期大坂城以前の城郭石垣にも矢穴自体が少数例見出されており、それらの矢穴とここで言う「古 A タイプ」矢穴実例との型式認定の作業が課題となる。古 A タイプと A タイプとの技術的、系譜的因果関係を考える上には、まず 16 世紀段階の城石垣の矢穴に古 A タイプが存在する蓋然性の検討が第一になるからである。また、石造物と城郭石垣の構築集団（石工の系譜）が同質なのか、異質なのかといった一見自明の基本的命題も再検討を行う必要があるからに他ならない。〔和田 2005〕の提言にも耳を傾けたい。

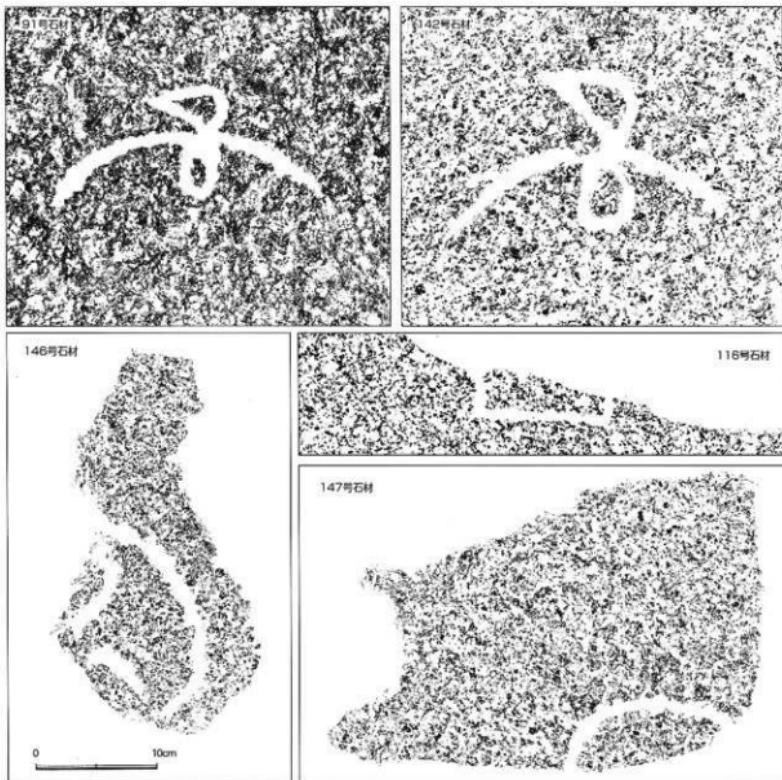
(ウ) に関しては、矢穴を彫り整えるといった基礎作業の面で大きな技術進化が伴ってくる公算はけっして低くはないであろう。矢穴の平面設定から矢穴壁・矢穴底の最終調整に至るまで、最も活躍するのは鉄製ノミとそれを打ち敲くセッタウ（石槌・金槌）であり、その発達史の上でソコウチノミの考案出現する時期との相関が矢穴の断面形に革新的な変化をもたらしたことがまず第一に考えられる。ソコウチノミは、サキノミ・テッカノミなどとともにマルノミの類に属し〔北垣 2005b、清水 2005b〕、矢穴を彫る道具の一つであるが、矢穴底を平らにすることに大きな役割を演じている。古 A タイプと A タイプの断面形態の差違は、その使用の存否と不可分な関係にあったと想像され、こうした石削・石加工道具の使い分けや変化が矢穴の形状を大きく規制したものと思われる。これらのことと、A タイプ矢穴の出現問題と関連させ、今後に向けての一つの課題としておきたい。

先に指摘した奥田尚氏の現場観察所見は、和歌山県高野山にみられる町石の矢穴をおそらく念頭に置いたものである。奥田氏の注目する高野山町石は、石種が黒雲母花崗岩であり、神戸市東灘区御影付近の石と推定されている。奥之院階段左手に建つ三十五町石には「文永三年（1266）丙寅十二月廿八日 比丘尼意阿」の銘を有し、これ以降、弘安 4 年（1281）に至るまで紀年銘が存在する。矢穴をあける技術の最古例は、高野山七十七町石の文永 5 年（1268）銘町石とされ、石材は片麻状斑状黑雲母花崗岩で、四国「志度花崗岩」の岩相を呈しているという〔奥田 2002〕。藤川氏や古川氏、和田氏の追求する上限資料とも 13 世紀中頃～後半という点で触れ合うものであり、7 世紀に大陸・半島から導入されたことを想定すれば、なお覆い難い年代的ギャップがみられる。

（森岡・坂田）

（3）検出刻印をめぐる二、三の問題

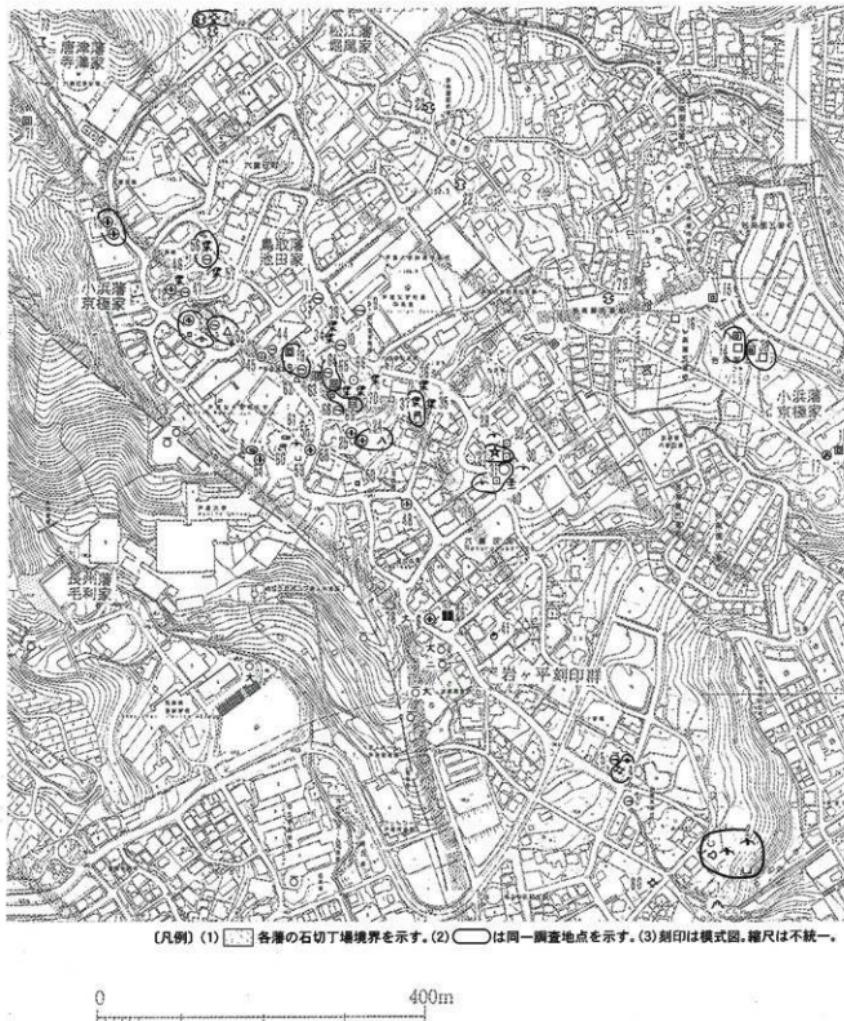
今回の調査では、5 石を数える刻印石ないしは刻印石片（91・116・142・146・147 号石材）が確認された（第 140 図）。本節では、複数個みつかった 91・142 号石材に彫りこまれた刻印「」の意義を中心に若干言及したい。91 号石材の刻印「」は、鳥をイメージしたもので、嘴を意識した頭部とその下の継長梢円形で表された胸部、左右両側には下向きの円弧で表現された羽根（翼）がとり付いている。上下の体長が 10 cm 弱、左右長が 22.1 cm を計測する大きさで、両翼は先にいくほど深く幅をもって彫られている。頭部や胸部の陰刻も比較的鋭く鮮明であり、当刻印は地表に顔を出し、從前、確認されていて、岩ヶ平刻印群の一覧表〔古川・森岡・



第140図 検出刻印拓影一覧（縮尺約1/4）

濱野ほか2003]には、通し番号をとって掲示されていたものである。142号石材の刻印「」(第84・140図)は、第IV章において既に詳しく報告した。要点を再掲すれば、やはり鳥をリアルに表現した刻印で、体長など一見して、91号石刻印よりひとまわり大きく感じられる。実際、拡大して比較してみても、幅広に線刻するクセなども手伝って、142号石刻印の方が大振りな仕上がりとなっている。計測値は頭部4.5 cm × 7.0 cm、嘴は91号石同様、左向きで尖らせて表現している。胴部分は縦に長い不整規円形で、尻部はやや平らに彫られ、縦5.4 cm、横3.8 cmの大きさを示す。翼はやや左下がりでバランスを欠くものの、概ね左右同じ表現で下向きとなっており、飛び立つ鳥の姿をイメージさせてくれる。向かって左翼12.8 cm、右翼9.9 cmを測り、91号石材のものより僅かに全幅は大きく感じられるが、左右先端同士の実長は21.3 cmを計測して若干小さくなる。

さて、二つの刻印は、同種の刻印と判断することに問題ないものであり、通称「雁」と呼ばれている刻印である。現段階では、当刻印の所用蕃の同定はできていないものの（一説に、毛利家も使用したという意見 [田中1999] や池田家とする説を聞いたことがある。）、今回の検出により、岩ヶ平刻印群内の分布について、ある程度の面的な把握が可能になった（第141図）。全く同種とまでは断定できないものの、類似刻印は岩ヶ平台地上において今回の検出例を含めて7例が確認されている（第12表）。古川久雄氏の手になる「岩ヶ平刻印群刻印石一覧」表 [古川・森岡・濱野ほか2003] は、藤川祐作氏の掌握した1970～80年代の発見データと表 [藤川1979] を追認、



第141図 岩ヶ平刻印群 刻印石の分布と各藩採石範囲 (1/6000)

(古川編 2003、森岡編 1998、竹村・白谷 2005a・b 資料、森岡・坂田 2005a・b・c 資料の分布図・一覧表・拓影を改変して合成)

刻印の性格には、まだまだ謎が多いが、大名などの採石領域や石工集団の持場と不可分な関係にあることは確かなようである。1石2種以上の場合は、時として重要な手懸かりを与えてくれる。

群番号	刻印模式	所在地 ()は旧所在地	刻印法 横×縦cm	石材種	刻印面 類別	現状・所見
28	鳥	芦屋市六麓莊町113番地	30×15	自然石	自然面	個人邸内に保存。現状未確認。
30	鳥	芦屋市六麓莊町121番地	32×14	割石	自然面	宅地造成に伴い埋没。
31	○□	(芦屋市六麓莊町121番地)	27×29 27×20 37×16	自然石	自然面	同一面に3刻印。○の内部不明。 宅地造成に伴い消滅。
53	①□	芦屋市六麓莊町40番地	25×(25) 33×9	矢穴石	自然面	個人邸建設に伴う発掘調査で検出。 断削の上、若宮町公園に移転保存。
55	鳥	芦屋市六麓莊町83番地	19×13	割石	自然面	芦屋学園サブグラウンド建設に伴い埋没。

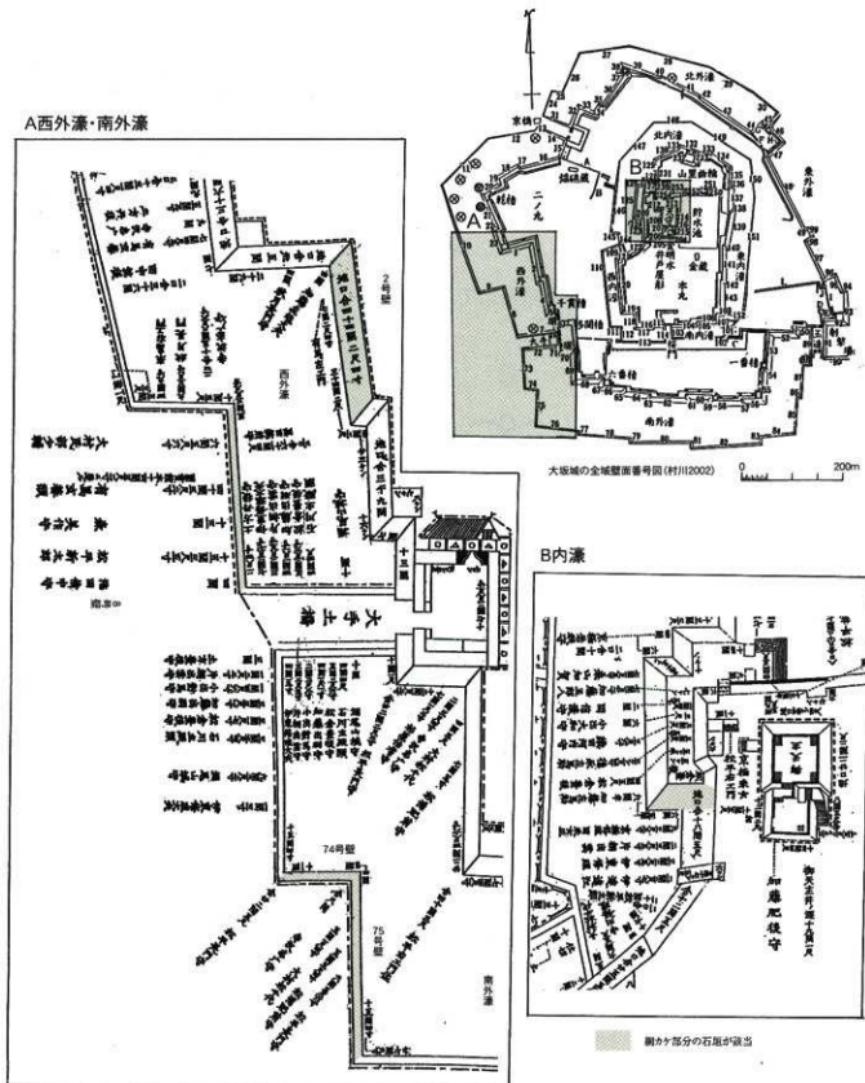
第 12 表 岩ヶ平刻印群 鳥刻印石集成一覧表 (今回の調査地点分は省く)

増補させたものであり、2003年1月段階での確認結果と集計である。第12表は、この表より雁(鳥)の刻印を抜き出して編成したものであるが、発掘前より確認されていた91号石材の刻印は表番号2であり、今回の調査に至るまでは、岩ヶ平刻印群の分布範囲にあって南限付近に位置していく明らかに孤立した存在であった。今般、142号石材で「雁」の刻印が新たに検出されたことにより、複数化し、その存在の意味合いがはるかに高まったと言える。換言するなら、C地区の台地面一帯に同一採石集團による石切丁場が広がっていたことを示唆するものであり、貴重な資料の追加として評価している。91号石材は、今回の発掘調査により92・93号石材と隣接して同一母岩から削り取られたものであり、明らかに採石過程で刻印が打たれている。岩石種が花崗斑岩であることも珍しい存在である(図版21下段左、付章)。これに対し、142号石材の場合は、自然石の最も目立つ上面に「よく見ろ」と言わんばかりに彫られたものであり、全くその差異を異にしている。後者は加工や持ち出しの意図が全くなかった地山に埋まり込む巨石を選んでおり、その機能は動かし難い石の大きさと存在自体が周囲の地形環境の中で目立つことであり、おそらく刻印表示のみを企図した「傍示石」と考えられる。この石が丁場の端を示したものか、丁場全体の中心部に居するものかは俄に判断できないけれど、この石を境としてC地区的南半部には数多くの元和~寛永期の剝石材が現に放置されており(第78図、図版41~43)、台地上面の自然石群の状況とはかなり対照的なあり方の差を示している点は見逃せない。少なくとも、石切丁場の現場にあって、機能や活動を異なる空間領域が接した状況の下、広がっていたことだけは強調できるであろう。

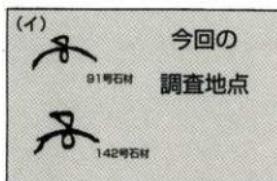
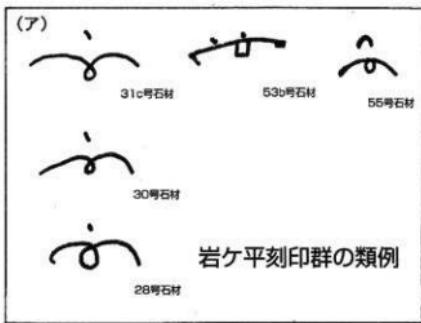
一覧表(第12表)28番の刻印「鳥」も同様に自然石であり、30番の刻印「鳥」も割石ながら自然面に打たれている。また、31番の刻印「鳥」も自然石に彫られたものであり、この石の場合、「鳥」と「○□」の2刻印が同一面に並刻されている点が注目される。並刻例は53番の「□」にもみられ、刻印面は自然面であるが、矢穴の施された石材である。これは現在、「若宮町公園」に移設・保存されている。並刻刻印は「①」と「□」である。55番の「鳥」は単独刻印であり、割石でありながら、自然面に彫られたものである。以上垣間見たように、「雁」の刻印は、第一に自然石や自然面を対象に穿たれたものが多い。この点、142号石材例はそれを典型的に踏んでいるが、他方、91号石材は、削加工が進んだ石材に打たれている。これら類例のうち2例は、若狭小浜藩京極家の石切丁場と推定されている場所で確認されているが(第141図)、当該調査地点の2例は京極家の刻印と抱き合わせの形で同一刻印として穿たれている例はないので、採石場・丁場サイドからの担当藩決定要因はなお乏しいと言える(表紙写真)。

ただし、石切丁場が剖普請的に分割されていたならば(古川2003)、領域的には、雁に関する刻印の分布は、小浜藩京極家と鳥取藩池田家に深く係わっていることだけは指摘でき、116号石材にみられる半欠の刻印「一」(第132・140図、図版29・38)が関係の一端を暗示しているかにみえる。この刻印については、P105~107に詳しく述べ記載したので割愛したい。以上、芦屋市内の既往刻印データから言及し得る点は限られたものである。

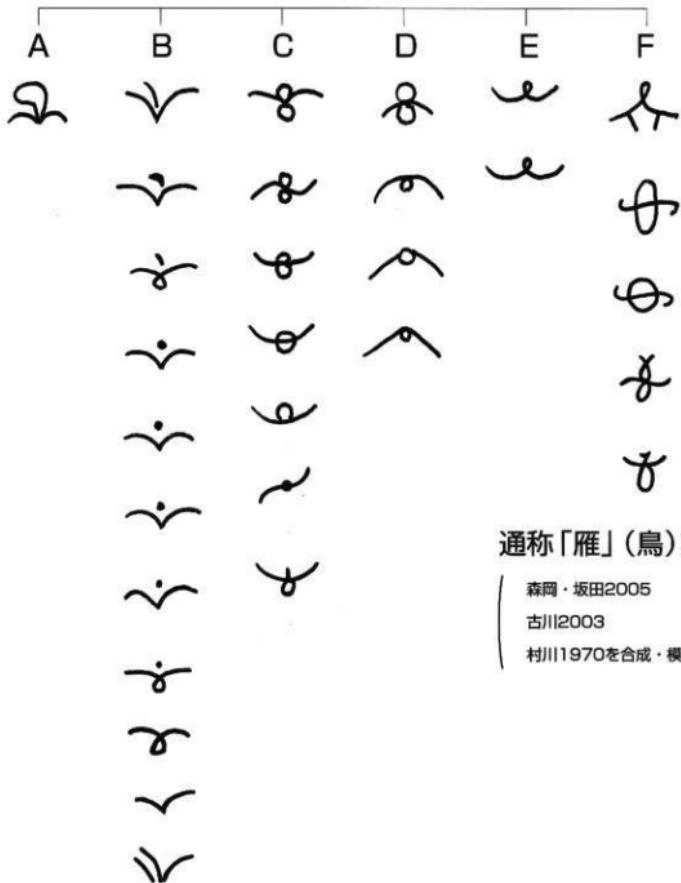
そこで、大坂城石垣の剖普請からの推考を加えたい。昭和34年度作成の石垣刻印所在別集成〔村川1962・



第 142 図 「雁」刻印の検出石垣と担当大名対象図〔小野 1973 復刻〕



(ウ) 大坂城石垣でのバリエーション



第143図 雁刻印のバリエーションと類似刻印の系統分類

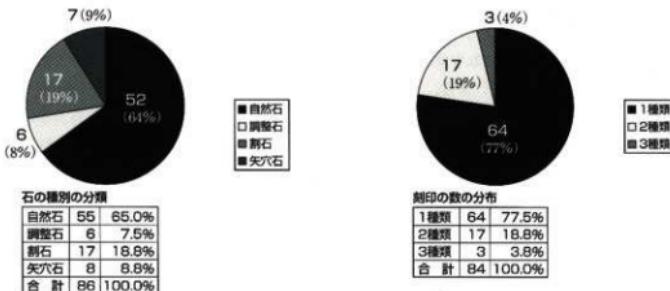
1970・2002再録】を参考に、大坂城の石垣刻印に当って見ると、西外濠2号壁D地区・8号壁石垣崩、南外濠74号壁・75号壁B地区、京橋口A地区、内濠124号壁A・B地区に類例および近似例を見ることができる。次に、大坂城普請丁場割の図（2種）とこれを整理した『大坂城誌』（小野1973復刻）の図、さらに実測調査を基に新たに集成された一覧表（村川2002）から、上記石垣部分の担当藩を抜き出してみると、西外濠2号壁が加藤左近大夫・有馬左衛門・黒田筑前守、西外濠8号壁が池田備中守・松平新太郎・森美作守・有馬玄蕃頭・大村民部少輔・寺澤志摩守、南外濠74号壁が松平長門守・寺澤志摩守、南外濠75号壁が寺澤志摩守・大村松千代・松浦肥前守・松平長門守・松平右衛門佐、内濠124号壁が松平長門守・加藤左馬助などとなる（第142図）。当時の誤認や筆者らの判読誤認もあり、もとより完全なデータではないが、石垣の普請丁場の区割においても現段階では担当藩を絞り込むには至らない。当然、築方と呼ばれる石垣構築集団が厳密に割合で弁別されていたとは考えられず、互いの集団が混成し合うことも十分考えられるが、刻印の広義の鳥は上記のごとくランダムに検出されることから、当刻印種を丁場割りの個別の担当藩を標識するものかどうかについては改めて検討する必要がある。

次に、広義の鳥を表徴する刻印について、若干の考察を加え、類例の増加と後考を待ちたい。

第143図は、通称「雁」（鳥）刻印を集成し、模式化と型式分類を試みたものである（ウ）。その上に掲げた（ア）は、岩ヶ平刻印群における類例であり（28・30・31c・53b・55番刻印石）、5石を数える〔古川2003〕。（イ）は今回の調査地点で検出された91号、142号石材の刻印を模式化したものである。前記したとおり、群内に類似刻印は7例存在する。

（ア）群と（イ）群の両者を比べてすぐに気がつくことは、（ア）群に比べ（イ）群は2例ともにきわめて写実的であり、報告部分で説明しているように、頭部と胴部の区別がはっきりとなされ、翼の表現もよりリアルである。一口に言って、秀麗な刻印である。これに反し、（ア）群はかなりデフォルメが加わり、胴部の表現はあるものの、頭部は点で示されるのみであったり（28・30・31c番刻印石）、「」で表されるもの（55番刻印石）であったり、53b番刻印石のように各部位がアレンジされて変化に富んだものとなっている。抽象化の程度からみて、この差は著しいと考える。（ア）群は（イ）群に比し、省略や変形が進んだものであり、同巧の刻印をイメージしつつもかなり変容していると言わざるを得ない。刻印が打たれた時期的差違については、全く不明と言わざるを得ないが（1620年から約9年程の短期間にすべて入る）、（イ）群が（ア）群に先行して用いられた可能性は考えられてよい。（ア）群の鳥の翼の多くは簡略化され、一筆書きのように見えるものが多い。胴部を含めた表現力もかなり異なる。岩ヶ平刻印群内の位置関係から、南端部に最も具象的かつ美麗な鳥の刻印があることは、意味ありげではある（第141・143図）。奥山刻印群では、D-9（ロ）・10（ロ）・3（ハ）・6（ロ）に類例がみられる〔芦の芽グループ編1968～73〕。

一方、先にふれた徳川期大坂城の石垣刻印について、現有資料から鳥ないしは鳥類似の刻印を抽出し、型式分類したのが（ウ）のグループである。考古学的な視点から分類されたA～F類型に若干の説明を加えれば、次のようにだろう。A類は胴部を欠き、頭部が大きく強調されたものである。頭はすべて左手に向けており、横顔の表現をとるが、これは（イ）群のリアルな鳥と同じ方向で一致する。B類はカモメが飛んでいるように翼を「」状に表し、頭を匂説点状ないしは斑点状に著しく簡略化する。匂説点状の頭部の実例はやはり嘴を左に向いたものが多く、（イ）群の約束事を踏襲しているかのようである。（ア）群の28・30・31c番刻印例はこのB類に該当し、拓影をみると限り、やはり左向きの原則がかろうじて伝わっていると解される。C類は頭部や胴部の両方ないし一方を円表現で表し、翼はB類と異なり、上側に半円弧状に広げたものが多い。D類はその逆で、両翼は左右とも下がるし、弯曲をもっていた翼が直線化するものなどが含まれる。C・D類のトップに掲げた刻印は、頭・胴とともに○印で表現される点で共通するが、前述したように、弯曲からみた翼の書き方は概ね正対となっている。また、C類が頭を残す方向に変移するのに対し、D類は胴を強調する方向に変異しているようである。ただし、こうした個々の刻印の違いは、時間の経過による変化を示しているとは言い難く、鳥を念頭に置きつつも刻印を彫ったであろう石工それぞれの個性や作業に与えられた時間、デフォルメの度合い、簡略化の指示、手本の存否、作画情報の交流などが複雑に絡み合った結果にはかならず、A～Fの諸型式についても、その類似関係が各型式間に存在するのか、疑問な向きが強い。しかし、最も簡略化した型式がE類である



第 13 表 岩ヶ平刻印群における刻印石の種別と刻印数



第 14 表 小豆島岩谷丁場における石材・刻印石の種別と刻印数

のに対し、下類は多くの変異（1型式1刻印と少ない）を個々に分けずに一括したものであり、これを分解すれば、鳥をイメージする刻印とは言え、大別しても少なくとも 10 数種を超える類別を数えることになるだろう。

鳥（通称「雁」）の刻印は、東六甲の石切丁場（奥山刻印群・岩ヶ平刻印群など）と藤川期大坂城石垣の両方にみられ、所用の意味合いは、石工の組を表示する定印なども含め両面から考えていく必要がある。

刻印石は前述したように、これまで用石の産状とはある種無関係で検出されてきた。それは長期の調査研究を通じて常に指摘されてきたことであり（村川 1970、藤川 1980、森森・古川・濱野ほか 2003）、施刻は自然石、矢穴石、矢穴痕をもつ削石などに広く及び、今回の調査地点ではまさにコッパにおいても存在した（146・147 号石材）。ただし、コッパは後世の石材の再利用の過程でも生ずるものであり、むしろ刻印が石の自然面にあるのか、割面にあるのかの方が重要と思われる。今回の調査現場における弁別では、自然石（142 号石材）、削加工石（91 号石材）、端石（116 号石材）が各々その典型的な遺例ということにならうか。

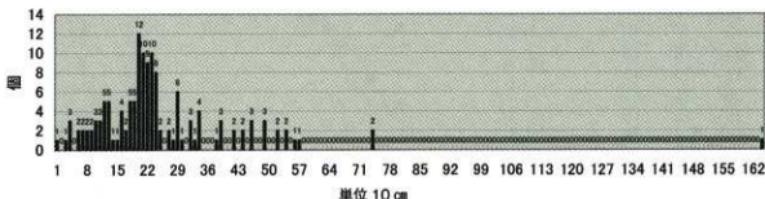
藤川祐作氏が先鞭をつけ（藤川 1976・1979）、古川久雄氏がくり返し増補、補訂をくり返してまとめた岩ヶ平刻印群の一覧表（古川 2003）によれば、刻印数は総数 80 石を数え、これに〔竹村・白谷 2005a・b〕で速報された毛利家丁場の一角のデータ（3 石）や当調査地点の刻印をもつ 5 石を加えれば、総数約 90 石を数え、これらを改めて統計的に見直すと、自然石 55 石（65%）、調整石 6 個（7.5%）、削石 17 石（18.8%）、矢穴石 8 個（8.8%）となり、自然石にそのまま施刻するウェイトが結構高いことが知られる（第 13 表左）。本来は先ず A タイプの矢穴ないし矢穴痕のみられる加工痕をもつ石材全体の数に占める刻印石の数（刻印率）が知りたいところであるが、岩ヶ平刻印群ではそのデータは遺憾ながら未処理である。

ちなみに、小豆島の岩谷丁場を一例にあげれば、基礎データ〔内海町教育委員会編 1979〕から起こした円グラフ（第 14 表）をみて明らかなどおり、1608 石中、刻印石は 138 石あっておよそ 8.6% を占める（第 14 表 B）。

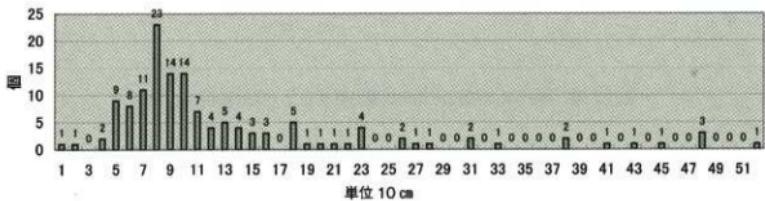
Aは刻印の有無を度外視してすべての石材を角取石・そげ石・種石に区分してその比率を比べたものであるが、小豆島では圧倒的に隅角部や平石に使用する角取石がおよそ半分近くを占め、目立って多いことが知られる。第14表のCのグラフは、これらの石材区分にしたがい、どの区分に刻印率が高いかをみたものである。種石にも存在するが(刻印率3.5%)、角取石により多くの刻印が認められる(刻印率4.8%)。有刻印のそげ石はきわめて少ない(刻印率0.2%)。

第14表のグラフDは1石に存在する刻印の数を表示したものである。1種類のものは刻印石138個中、106個を占め、76.8%と当然ながら高率である。しかし、2種類以上認められるものも約7分の1存在しており、中には3~5種類のおそらく目的を異にする多様な刻印が打たれている石材が認められている点は見逃せない事実である。翻って、岩ヶ平刻印群についても同様な分析を加えると(第13表右)、刻印数は1種64石(77.5%)、2種17石(18.8%)、3種3石(3.8%)となり、最高4種類が1石に遺存するまで多種類のものがやはり認められる。これらに関しての歴史的な解釈の一端は既に述べられている〔森岡・古川1992、古川2003〕ので、本節ではくり返さないでおく。ここで確認できることは、刻印石は小豆島岩谷丁場では調整石が半数近く占めるのに対し、

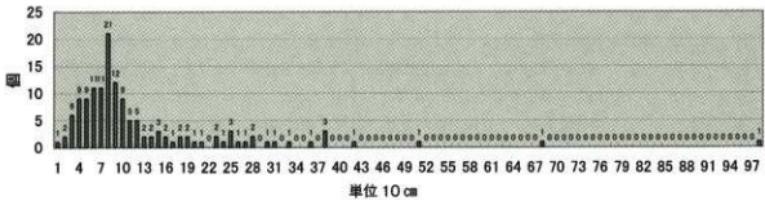
刻印石 長辺



刻印石 短辺

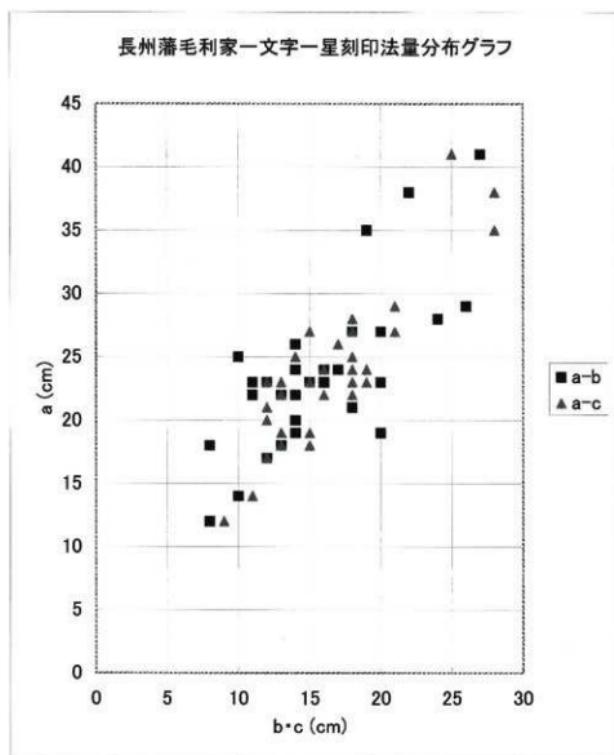


刻印石 高さ



第15表 小豆島岩谷丁場にみられる刻印石の法量

番号	a	b	c
1	17	12	12
2	22	14	18
3	23	11	13
4	20	14	12
5	22	13	16
6	23	15	15
7	41	27	25
8	24	14	18
9	22	11	13
10	24	16	19
11	23	16	18
12	25	10	18
13	27	20	21
14	28	24	18
15	38	22	28
16	26	14	17
17	35	19	28
18	23	12	12
19	18	8	13
20	14	10	11
22	12	8	9
23	27	18	15
24a	19	20	13
24b	29	26	21
25	18	13	15
26	19	14	15
27	27	18	18
28	21	18	12
29	24	17	16
30	23	20	19
31	25	10	14



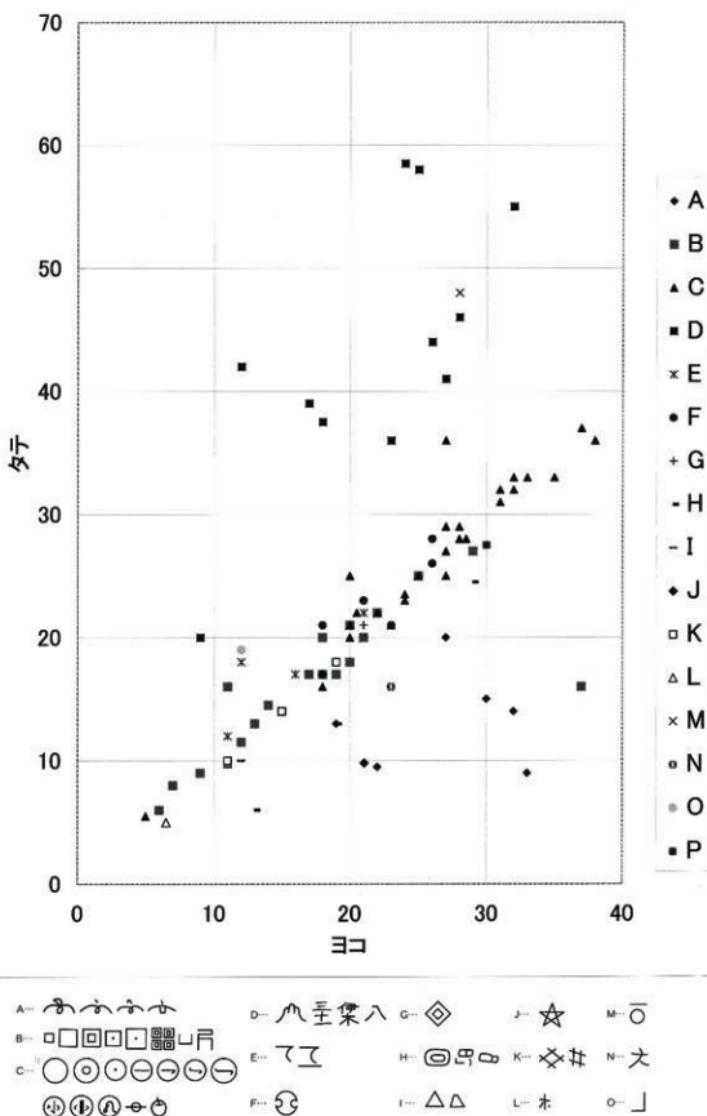
第16表 奥山刻印群刻印石刻印法量分析グラフ（長州藩毛利家のみ）

岩屋の岩ヶ平丁場では自然石が半数以上あって主体をなす違いが存在すること、刻印の種類については両丁場で75%前後が1種類であって、よく共通していることなどである。

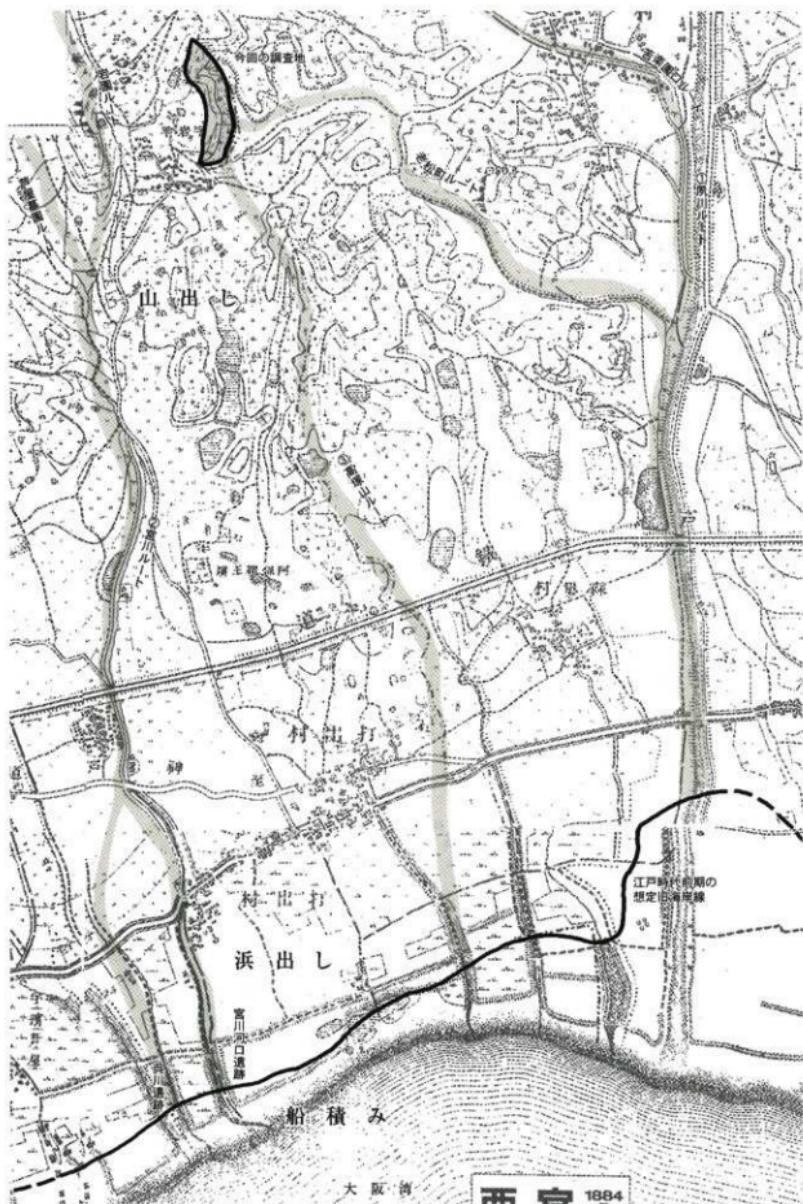
統いて、既往データから作成した第16・17表により、刻印種別にみた刻印範囲の大きさの違いについて一瞥すると、予想したように、刻印種による一定のまとまりとランク差が看取され、とくにAとした「雁」(鳥)刻印にも定められた刻印の領域=大きさが認められるようである(第17表)。参考までに広い藩占有領域で検出刻印数も多い長州藩毛利家の「○」に関してのデータをながめると(第16表、[古川1998]を基礎に作成)、逆に刻印の大きさに厳密な規範が存在したようにはみえない自由奔放さがうかがえ、その差が興味深い。ちなみに、aは上下の長さ、bは「一文字」の長さ、cは毛利家家紋「三ツ星」省略の「一つ星」の円左右の値であり、グラフはa-bとa-cの両方の相関をみたものである。いずれにせよ、刻印の分析については、金沢城のように使途・時期による差も顕著であるが〔富田2003・2005、富田・加藤2005〕、粗放なものを叩き台として呈示するにとどめたい。なお、参考までに、刻印石の大きさに関するデータを第15表として掲げておく。

(森岡・坂田)

石碑 番号	種別	横(cm)	縦(cm)
2	A	22	9.5
28	A	30	15
30	A	32	14
55	A	19	13
31b	A	27	20
53b	A	33	9
16	B	19	17
18	B	22	22
26	B	25	25
29	B	17	17
42	B	21	20
50	B	7	8
59	B	9	9
63	B	12	11.5
71	B	13	13
14b	B	18	17
19a	B	14	15
19b	B	20	21
20b	B	29	27
27b	B	20	18
31c	B	37	16
37b	B	11	16
38a	B	13	13
38b	B	18	20
64a	B	13	13
69a	B	6	6
69b	B	15	14
3	C	23	21
6	C	28	29
9	C	31	31
10	C	38	36
11	C	32	33
12	C	28	28
17	C	32	32
21	C	37	37
25	C	28	28
41	C	20	25
43	C	20	20
44	C	29	21
45	C	22	22
47	C	28	28
48	C	31	32
51	C	27	36
54	C	28.5	28
58	C	33	33
66	C	24	23.5
68	C	27	25
13	G	27	27
13b	G	28	28
14a	G	18	18
19c	G	5	5.5
31a	C	27	29
52a	C	24	23
53a	C	25	25
56b	C	35	33
64b	C	20.5	22
34	D	32	55
35	D	27	41
36	D	28	46
39	D	17	39
40	D	9	20
46	D	25	58
65	D	18	37.5
67	D	24	58.5
70	D	12	42
37a	D	23	36
56a	D	26	44
72	E	21	22
73	E	11	12
20a	E	12	18
49a	E	16	17
22	F	21	23
23	F	21	23
32	F	18	21
76	F	28	26
79	F	26	28
33a	F	23	21
7	G	21	21
8	H	25	24.5
60	H	19	13
81	H	13	6
62	I	11	9.5
75	I	12	10
52b	I	15	14
27a	J	18	17
80	K	15	14
33b	K	19	18
74a	K	11	10
74b	L	8.5	5
77	M	28	48
78	N	23	18
49b	O	12	19
1	P	30	27.5



第17表 岩ヶ平刻印群刻印法量分析グラフ



第144図 石材搬出ルートの推定図

(4) 岩ヶ平刻印群を中心とする石曳き道の推定と船出し

石垣用材の生産の場たる石切丁場から消費地である大坂城の普請丁場まで、直線距離にして 20.3 km。その間、陸送と海送によって調達された石材は当時の運搬技術を駆使して運ばれている。実際、運搬に供された距離は陸路約 2.8 ~ 3.1 km、石舟に載せての海路は 13 km 前後であろうか。すべて推量にすぎない数値である。今回の調査現場では、その運搬ルートに関する手懸かりが微証とはいえ得られた。本節では後考に備えて、岩ヶ平刻印群を中心とする山出しから浜出し、船積み、海出しに至るまでのルートに関する陸上運搬の問題を考え、いくつかの仮説を提示しておきたい（第 12・28・144・145 図）。

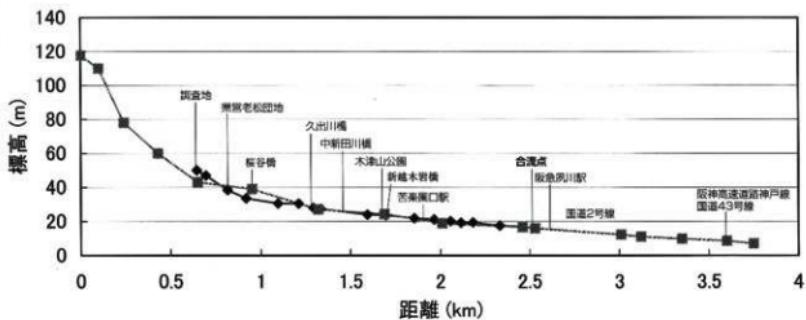
石材の搬出ルートについては、遺構としての石曳き道の検出が直接の証拠物件として重要であるが、古絵図や文献史料を全く欠く上、明確な発掘出土例も皆無に等しく、この方面的調査・研究は立ち遅れている。古地図と現状地形の踏査や地名研究などに加え、今回の調査地点を含めた周辺の点的な発掘調査状況をヒントにしつつ、点と点を結ぶ石曳き道の想定に焦点を当て、岩ヶ平刻印群全体の搬出石材のルートを推察していく。まず、基礎作業として、陸地測量部による明治 17 年（1884）作成「西宮村」と明治 18 年（1885）作成「今津村」を合成使用した「西宮」（縮尺 1 : 20,000）〔清水編 1995〕をベースマップとして用い、江戸時代前期頃の海岸線を江戸時代中期の新田開発状況を加味しつつ想定し、推定される石曳き道を加筆した（第 144 図網かけ部分）。ルートの仮定に際しては、基本的には末梢河川の動きに重点を置いた推定を行っている。理由の第一は、今回の調査区の南西端をかすめて南流する通称「どんどん川」の河床で、かつて調整石の残材や「」をもつ刻印石（番号 1）が確認されていることや、旧海岸線付近に位置する呉川遺跡の存在（第 15・22 ~ 25・144 図）、宮川河床などで調整石や準調整石が確認されていることを積極的に評価しているからである。厳密には、河床だけではなく、河川に伴う河岸段丘平坦面をも視野に入れ、南北に高低差の少ない比較的なだらかなルートを想定している。第二には、消極的な想定ではあるものの、多少起伏を伴う台地ルートは、戸室山石切丁場跡と金沢城を結ぶ石曳き道の例〔金沢市 1996〕を参考に、比高を考慮しながら最短距離を設定した。こうして設定を試みた諸ルートは、大きく 3 つに分けることができる（第 144・145 図①～③）。すなわち①夙川ルート、②宮川ルート、③高塚山ルートであり、以下に、想定した各ルートの具体的な説明を加えたい。

①の夙川ルートは、浜出し場を現在の夙川河口近くの西宮市中浜町・川東町付近に求め、上流は今回の調査地の開析谷開口部（岩園町）を出発点として、老松町から樋之池町→松ヶ丘町→久出ヶ谷町とたどり（久出川に沿って木津山町→般山町→雲井町）、相生町・松生町境から南に折れ、阪急電鉄神戸線夙川駅付近に向かう【老松町ルート】をあげることができる。夙川の分流に沿う弯曲のみられる谷合の石曳き道となるが、最も蓋然性は高い。いま一つ、有力である阪急電鉄甲陽線苦楽園口駅の手前、南越木岩町と石剣町（いしばねちょう）境を北西に折れ、夙川支流である中新田川を通り、桜橋、三笑橋、三楽橋を通る【苦楽園ルート】も逆推でき、岩ヶ平刻印群北東域丁場からの石材搬出には便がある。当ルートは、東接する越木岩刻印群から石材を搬出するルートと共有する可能性もあるだろう。第 145 図①を見ると、この二つのルートは谷筋を巧みに利用してなだらかであり、夙川に取り付くまでに、地形の障壁はさほどない。また、苦楽園ルート付近の地名には、「般岩町」「南越木岩町」「石剣町」「角石町」があり、「岩を剝ねる（切る）」「角石」（石垣隅角部の石材）など石切・石垣用語が見られることから、採石活動に関わる行為や用石のなごり、あるいは残石の遺存などが窺える。

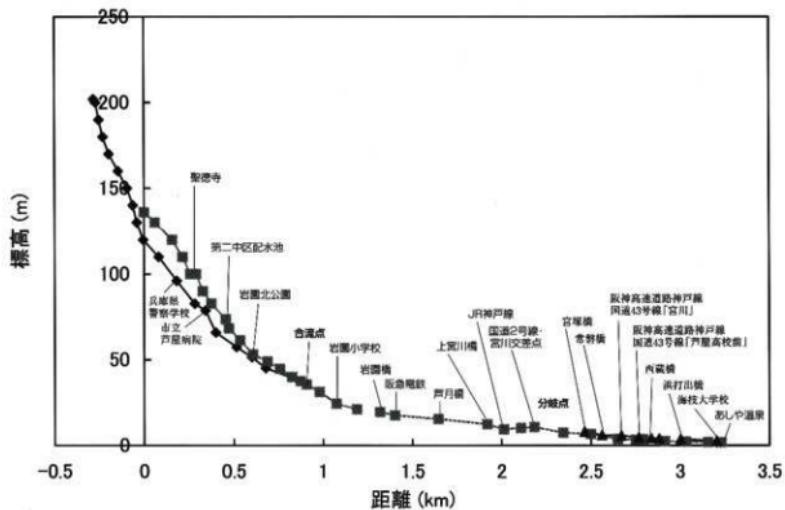
②の宮川ルートは、船出し場を打出橋から分岐した興川町・西藏町付近の 2ヶ所の沖積地に求めるものである。船付場における荷出しの際のストックヤードを想定したものであり、今後、西藏町の堀切川河口付近や宮川河口岸付近でも調整石が検出されることが期待されよう。上流は、宮川を源り、岩園小学校付近で、芦屋墓園・兵庫県警察学校方面へと向かう【芦屋墓園ルート】と、聖徳寺・朝日ヶ丘ポンプ場（水道部）方面に向かう【岩園ルート】が想定される。特に、【芦屋墓園ルート】とかかわる芦屋墓園は、既に奥山刻印群 K 地区として分布調査や一部発掘調査も行われており、採石場（長州藩毛利家丁場）の存在が確認されている〔森岡・古川 1998〕。そして、この調査と並行して行われた六龍荘町の発掘現場（大和システム株式会社事業地）でも毛利家丁場の東端が確認されており、岩園ルートが用いられたと考えられる〔芦屋市教育委員会 2004、竹村・白谷 2005a・b〕。

③高塚山ルートとしたものは、今回の調査地から高塚町の西端をかすめ大谷町・弓場町・打出町へ台地上を下

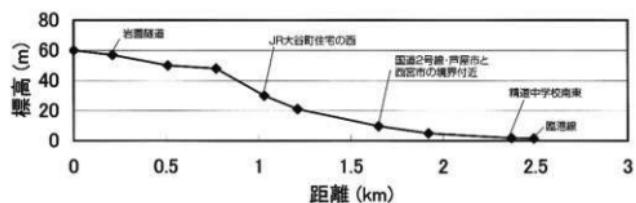
①夙川ルート(苦楽園口・老松町)



②宮川ルート(岩園・芦屋墓園)



③高塚山ルート



第145図
推定石材搬出ルートの
勾配計測表

※ただし、計測値は芦屋市(平成10年)・西宮市(平成17年)の市基本図に基づいたもので、からずしも該期の正確な標高を示していない。

るるルートであり、蓋然性が最も低い運搬路を考えている。高塚町付近で丘陵地形が若干高くなるものの、台地の上は比較的なだらかな高低差を示している。難所の一つは石材のひき上げが加わることであろう（他ルートはひき下ろしが主体）。ただし、当ルートについては、現在の住宅街を走行するルートであり、考古学的な実証が困難であることが現としてある。

今後の課題として、当該ルート上で調整石などの物的証左を確認することが肝要であり、呉川遺跡のような船積み地点は未だ把握されていない。海岸部付近でのルートはあくまで想像にすぎない。

以上の諸ルートの設定は、実地踏査を加えたものの、机上の想定を加味した部分もかなりあり、もとより仮想の城を出ない。これまで呉川遺跡の発見〔藤川 1991a、森岡・古川 1992〕などによって推察されてきた②のルート以外に今般、複数の候補が考えられたことは、今回の調査成果に基づく大きな進展であり、他の刻印群と浜出し・海出し（大阪湾海上ルート）との対応関係、その具体的な搬出路の究明など、誘引される総合的な運搬ルートの研究は、積極的に取り組むべき重要な課題の一つと言えよう。
（森岡・坂田）

（5）戸田氏鉄による尼崎藩治政と東六甲の徳川大坂城採石場

まとめの最後として、文献史料や地方史・地域史の類を多少探索しつつ、本市域を江戸時代初期に領有した戸田氏鉄の出自・人物像や事跡、とくに幕藩体制下の尼崎藩の経営、さらに徳川再築大坂城における作事・普請と東六甲の採石場と周辺領村との関わりなど、知り得たことをいま一度整理して、最も立ち遅れている日本近世史上における石切丁場経営の問題などについて、思いつくまま筆を及ぼしておきたい（第18表、第146図）。

幕藩体制の揃籠期である江戸時代初期、天下をひき継いだ徳川氏が全力を傾注して急いで大坂城の再建は、秀忠・家光の将軍二代にわりに行われ、一門である越前福井67万石の松平家、諸代の大和高取3万石の本多家、豊後日田6万石の石川家の3家以外は、すべて西国の外様大名が起用された。二条状・伏見城・江戸城・駿府城・篠山城・名古屋城などの修築や新築も大体では同じ方式であり、それを踏襲した背景として、発達した築城技術の経験保持層が徳川諸代の大名にはほとんど恵まれず、かつて聚楽・淀・石垣山・肥前名護屋・伏見などの構築にあたった外様大名が意識的に登用されており、「古の定めに堀は東国大名、石垣は西国大名」（『明良洪範』）と、石垣普請の専門性が西国一円の大名（外様と概ね一致）の手に常識化していたことを岡本良一氏は指摘し〔岡本1970〕、外様大名の経済的負担だけが唯一の目的でなかったことを示唆する。

大坂城再築にあたって城づくりに名を馳せた藤堂高虎が普請總指団として指揮をとり、当初から普請總奉行として戸田氏鉄がその任に着いたのも（第1表）、彼らの優れた力量がかわれてのことであった。大坂の陣後、元和3年（1617）に尼崎藩主となった戸田氏鉄は、尼崎城を築いて大坂を防衛する西国支配の一拠点とした。

尼崎の地は大坂の西に隣接する交通の要衝であり、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いまでは、豊臣氏の直轄地であった。豊臣秀頼が摂河泉65万石の一大名に低落した後は、徳川氏が堺や大津・奈良とともに尼崎の支配を受け継ぎ、伏見を拠点とする畿内進出が実現しつつあったが、豊臣政権下に尼崎郡代役を勤めた建部寿徳は、徳川氏から旧領の支配をそのまま承認され、慶長12年（1607）まで直轄地を領有する地方官の役割を継承した。その都代任務は建部政長が元和元年（1615）まで守り、西国往還上の地理的位置はきわめて良好で、堺と並んでその要地として重要度はますます高まったのである。

そして、慶長19年（1614）に起こった大坂冬の陣の備えとして、江戸幕府は大坂包囲と経済封鎖に努め、大坂方面への船止め、大坂方にわたる兵糧なども建部政長が阻止している。こうした状況は翌年の大坂夏の陣段階でも再開され、九州や四国の諸大名に米積みの邏船すべての尼崎入港を命じ、水軍の集結先になるとともに、西方勢力の監視的機能も果たしたのであり、その延長線上に戸田氏鉄による尼崎支配が位置づけられる。

氏鉄の父、一西（かずあき）は、関ヶ原の合戦の戦後処理が慶長7年（1602）まで続く中、徳川譜代家臣團が68の多きにのぼる大名に取り立てられることになった一人であり、氏輝系の氏鉄の代に尼崎への配置が行われたのである。その結果、元和3年（1617）、建部氏は播磨因林田へ移封され、池田氏も同國鷹へと転出しており、氏鉄は近江の膳所から尼崎入部を命じられている。直轄・旗本領と譜代大名によって現行の尼崎市域は占められるが、成立時の尼崎藩は市域全体の村高の約60%を領有したという〔八木1968〕。

さて、戸田氏は徳川氏の前身松平氏と深い関係にあり、その松平家帰属は享禄2年（1529）の昔、氏鉄の曾祖

日本のできごと	元号	西暦年	大坂城工期	芦屋・大坂周辺のできごと
武田玄支死去。織田信長、尼足利義昭追放。 羽柴秀吉、近江・農浜城落城。	天正 元	1573		
織田信長、挾持・石山本願寺を攻撃。	2	1574		
信長、安土城築城。	3	1575		
信長、安土城下町の税を定める。	4	1576		
上杉謙信死去。織田信長、毛利・水戸軍と戦う。	5	1577	石山本願寺	戸田氏鉄、生まれる。
荒木村重の有閑城落城。のち落城。	6	1578		摂津高槻城主高山右近、信長に降伏し教会を守る。
本願寺、信長と和睦する。則知、石山を退去。	7	1579		
京都大洪災、西園寺人稱流される。	8	1580		信長、郡山城をのぞく大和諸城の減削を命ずる。
本能寺の変。山崎合戦、清洲会議。	9	1581		11年8月、本庄・芦屋郷・山鹿庄に対する秀吉の禁制。池田恒興、大坂を創する。尼崎城、三好秀次、羽柴秀吉、大坂城築城(第1期工事)、天守台と本丸。
駿ヶ谷合戦。	10	1582		
小牧・長久手戦。	11	1583		加藤嘉明、尼崎・西宮・芦屋から裏に遷殿の命。
小牧、手合戦。	12	1584		秀吉、豊臣秀次を受ける。大坂城第2期工事(二の丸)。
秀吉、岡山となる。摂津を直轄地とする。	13	1585		
應永家康、大坂城にて秀吉と会見。	14	1586		
聚楽第(城)建設。秀吉、九州平定。	15	1587		
秀吉、刀狩門を発布。	16	1588		
淀城の普請開始。	17	1589		
秀吉、小倉城攻撃、石垣山城を築く。	18	1590		
千利休、自殺。	19	1591		
秀吉、朝鮮征伐のため、肥前名護屋城へ。 島浦倭城・金海竹島倭城・松真浦倭城築城。 伏見城築城。	文禄 元	1592		
秀吉、豊臣秀次に自殺を命じる。	2	1593		
慶長大獄死発生。	3	1594		
慶長の役。繩天屢城・猿山屢城築城。	4	1595		
豊臣秀吉死去。	5	1598		
秀頼、伏見城より大坂城に移る。	6	1599		
関ヶ原合戦。	7	1600		
東海道に伝馬制を設ける。	8	1601		
豊臣秀忠、方広寺大仏殿再興。	9	1602		
徳川幕府の創立。家康、征夷大將軍となる。	10	1603		
朱印状制度の始まり。	11	1604		
徳川秀忠、第二代将軍となる。	12	1605		
彦根城の完成。	13	1606		
彦根本丸の完成。	14	1607		
企全各城で大坂城ラッシュ。	15	1608		
尾張名古屋城の奉納。	16	1609		
尾張名古屋城の完成。	17	1610		
家康、秀頼、二条城にて会見。	18	1611		
『公家間法度』の制定。家康、江戸入府。	19	1612		
大坂冬の陣起こる。方広寺繪像事件。	20	1613		
大坂夏の陣起こる。幕府、一国一城令を発す。	元和 元	1615		
徳川家康死去。キリシタン禁教。	2	1616		
家康、東閣大権現の神号受ける。	3	1617		
朝鮮使節通使に潤見。	4	1618		
伏見城築城、大坂城代、被賜設置。	5	1619		
桂離宮宮室開設。	6	1620		
シカとの御番詔め。	7	1621		
京都市中法度決定。江戸城木丸改築。	8	1622		
徳川家光、第三代将軍となる。	9	1623		
日光東照宮開門完成。	寛永 元	1624		
東伏見意寺寺領創建。	2	1625		
天皇、二条城に行幸。	3	1626		
秀忠、紫雲と上人号勅許を無効とする。	4	1627		
江戸大震災。江戸城被災。	5	1628		
武家諸法度の改定。	6	1629		
マカオとの貿易再開。	7	1630		
泰吉船開港。	8	1631		
徳川秀忠死去。	9	1632		
草履法度規定改定。徳川忠長自殺。	10	1633		
出島築造。家光、隠岐使潤見。	11	1634		
参勤交代制の確立。	12	1635		
江戸城改築。寛永太宝時造開始。	13	1636		
朝鮮通信使米来。				
鳥原の亂。	14	1637		
武家諸法度改定。	15	1638		
鍋島。	16	1639		
大名・旗本に後約令。	17	1640		
諸大名にカリリスト教徒の捜索を命じる。	18	1641		
寛永の大饥饉。	19	1642		
田畠水代充實の禁止。	20	1643		
幕府、減税令・國稅額を作成させる。	正保 元	1644		
東照社に官号えられる。	2	1645		
防火に関する法令を出す。	3	1646		
ボルトガル船への通商拒否。	4	1647		
江戸中清法度、大阪市中諸法度制定。	慶安 元	1648		
慶安の御駕齋。	2	1649		
伊勢おかげ参り流行。	3	1650		

第18表 日本書・大坂城と芦屋の出来事略年表

父氏輝時代に遡る。居城は三河国渥美郡田原城であり、その領地は八名（やな）・宝飯（はい）2郡を越えて知多半島の一部にも及んだ。戸田氏は三河国衆中最も早期に徳川氏傘下に入った点で特筆すべき三河譜代であり、政光系戸田氏のような嫡系ではないが、庶家に属していた。戸田左門一西は徳川氏に従って長篠の合戦をともにし、家康の関東入部に際しては、天正18年（1590）、武藏国高麗郡鯨井郷（現埼玉県川越市）の10ヶ村5000石を与えられている。関ヶ原の合戦では東軍秀忠一行と東山道を行軍し、一方氏鉄は東海道を家康について進軍した。東軍徳川譜代家臣団の大名新規取立てにより、戸田氏は慶長6年（1601）2月、近江において2万5000石の加封となり、武藏5000石の温存に加えて3万石の大名として大津城に転封された。ただし、直後に大津市膳所ガ崎の方に築城の命を受け、戸田一西は慶長7年（1602）その城主となった。この城は京の東の守りとして位置的にも重視され、戸田氏の在城は16年に及び、その一族に対する徳川氏の信頼の絶大なる度合が知られる。

ところで、東三河の雄族系譜の戸田氏鉄は、尼崎城・大坂城以外に近江国膳所ガ崎城なども築いた築城の巧者であり、建部氏、池田氏の尼崎領有を後継して、畿内先進地の攝津四郡のうちにおいて尼崎藩5万石の譜代最初の藩主となった。

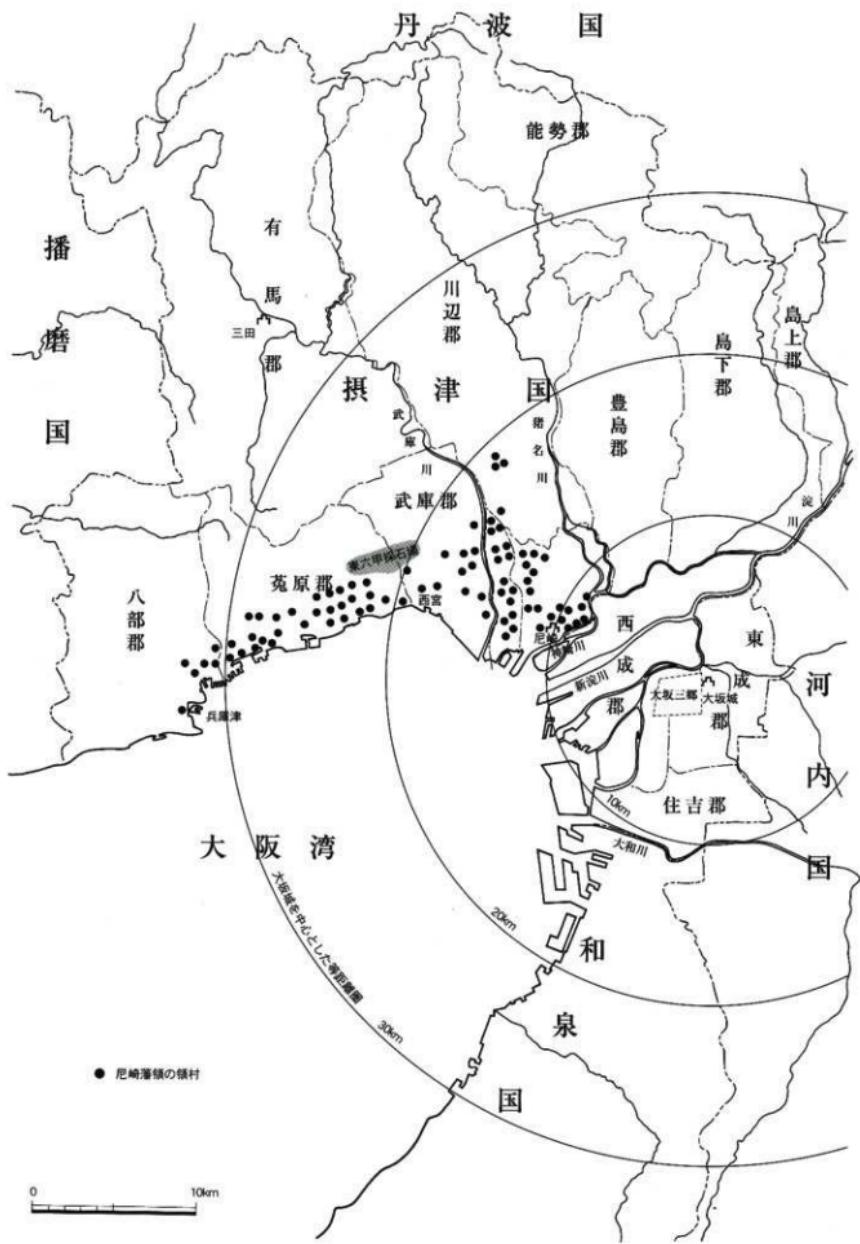
尼崎の地に氏鉄が新築した城は、入部後の幕府による命であったが、大坂の陣の段階で建部政長・池田重利らが守備した旧尼崎城が存在しており、本丸・二の丸あるも天守閣のない四方五十間ばかりの小規模なものであった。元和2年（1616）に淀城修築を開始し、これにひき続いて元和3年（1617）、尼崎城の新築、同年中に高槻城の修築、翌年の元和4年には明石城の新城建設へと計画を進めたり、江戸幕府の畿内防備体制の一貫として支城としての尼崎城の役割は重要視されたのである。

尼崎城の築城工事は元和4年（1618）より開始され、旧城の10数倍とも言われる規模の天守閣を東北隅にもつ平城が完成した（加藤省吾所蔵尼崎城絵図）。戸田氏による尼崎藩経営は1617～35年の10数年であるが、侍屋敷の屋敷割りも随時進められ、寺町も形成され、街路改修や新街路開設など城下町全般の整備や中国街道筋の変更なども行われた。そして土地支配はいわゆる地方知行制を温存させており（中西忠敬文書尼崎藩戸田氏鉄地方知行状、元和5年）、少なくとも寛永期にまで残っていた制度と考えられている。

氏鉄は天正4年（1576）～承応4年（1655）生没の治世の手腕にたけた人物であり、城下の整備のみならず、川の開削や海岸防潮など治水工事にも実績をあげている。左門殿川（神崎川の分流）の開削工事はその典型であり、築堤や改修の普請に技術力を注いでいた。大垣藩御徒士衆の一人、清水五左衛門の事蹟〔伊藤1934〕もその手腕の陰の力として注目されてよい。氏鉄は学問的にも儒学を学び、林羅山やその門下、京都の菅得庵を招いて老莊思想にも精通していた。明暦2年（1656）に原型が完成した転封後の大垣藩制定の「定帳」の体系的本格的法典の内容から察すれば、尼崎時代20年の藩政の行財政、貢租、その他の支配・収奪形態の整備のゆきとどいた治政の実態が類推でき、その統治下において今回報告する徳川大坂城の東六甲採石場もその場が選ばれ、支配領域下の10年間にわたる石切丁場の経営が行われたことになる。

戸田氏鉄による対農民政策の基本理念や方針は、「大垣藩地方雑記」に認められている「条々」（郷中諸法度）二三カ条や別項規定として補足した「走り百姓法度」（走候百姓御法度之覚）五ヶ条、「訴人糞美規程」（訴人仕候者に御糞美之覚）七カ条の布達によって詳細が知られ、転封後の大垣領時代に踏襲された尼崎時代の考え方や法令基盤を類推することができる（八木1968）。寛永13年（1636）の『郷中諸法度』二三カ条の内容をみて痛感することは、八木も強調する「領内の農業労働力を確保する政策」の貫徹性であり、出国の禁止、人身売買の禁止がうたわれ、代官、給人でさえ、許可手形なしに人馬を激發することを禁じている。私的な農民労働力の使用を厳しく制限するものであり、「訴人糞美規程」では、山林・竹木の伐採など山いじりも密告奨励により厳重に規制されているのである。

寛永以降の幕府施策の動態で特徴的なことは、在地農民の夫役労働力が大名に賦課された軍役から次第に新田開発事業や治水などの土木工事に移行したことであり、そうした社会背景の下、採石労働へ激發された労働農民の位置づけが考慮されるべきであろう。野面積み段階の豊臣期大坂城の築城体制は軍役的性格がまだまだ強く、武士団が築石を引く作業に多勢従事したと考えられている（大団2003）。安土城築城の延長線上で行われた軍役築城であり（大団1987b）、手ごろな自然石対象のため、技術より力役の投入とその強権発動の主体たる武士層の稼働が注目されるのである。大団正美氏も指摘する石場の未固定、運搬行為による所有権発生、それと不可分



第146図 大坂城と東六甲採石場と近世初期尼崎藩の領村分布 [尼崎市 1968 を大幅に改変]

な野陣による移動的な丁場経営は、徳川期の石切丁場と比べ随分ヒアタスを感じさせる。つまるところ、その進化は石場の固定=藩ごとの丁場占有であり、池田光政家老の伊木三十郎石場の存在〔古川 1992〕や藤井重夫氏が注目する刻印傍示石〔「加藤肥後守〔忠広〕石場 これより川南 ひかし」〕〔藤井 1991〕など、テリトリリーの監視、労働拠点のアトリエ的存在を顧みるならば、在番を前提とする「小屋掛け」は当然あってしかるべきである〔大國 2003〕。ただし、武士層の比重がなお高い印象を受ける大國論より、より一層、在地農民層と石切技術者の担い、主導によって藩名を笠に着た名目的な採石活動が展開されたと考えられる。

戸田に続く、青山氏の時代を含め、尼崎藩の領村は摂津西部の海岸線一帯に展開している（第146図）。川辺・武庫・菟原・八部の四郡であり、東六甲の石切丁場と直接関連しやすい位置に所在する村は、武庫郡の広田・越水・越木岩新田・西宮、菟原郡の打出・芦屋・津知・三条・森・中野・北畠・田辺・小路・岡本・深江・東青木・西青木・野寄・郡家・田中・住吉・横屋・魚崎・平野・高羽・八幡・都賀・石屋・徳井・籠原・玉毛・畑原・河原等々であり、その支配はまさに所領配置に分散性のない領国大名的な要素をもっていた。東六甲に展開した採石場とこれらの村々を江戸時代初期において結び付ける史料的手懸りは現在、皆無に等しいけれど、石切丁場で夥しい人足などの労働力の現地調達や運搬路の利用（本章第4節）が想像されることを前提とすれば、在地領民と円滑な採石活動との関係を当然模索しなければなるまい。

幕藩体制下において、幕府は諸大名に軍役を課したが、そのあたりは領内村の農民に陣夫役を賦課することになり、労働地代としての夫役を負担する農民が村単位に役家や役人の形で身分設定される。いわゆる役家体制であるが、こうした制度の下に石切丁場への労働提供なども加えられ、農民夫役の増大が彼らに疲弊をもたらしたこととも十分考えられてよい。

(森岡)

(6) 総 括

徳川大阪城関係の石切丁場跡の発掘調査は、芦屋市内に限っても大小20数回実施してきた。周知遺跡範囲外の工事立会なども含めると、膨大な調査件数となる。近年は、年間の埋蔵文化財調査件数にしめるウェイトも高いものとなっている。ごく最近では、最も軽微な立会調査においても、市内の西藏町や山芦屋町で貴重な石材がみつかるケースも生じており、石切丁場を離れてからの埋蔵状況については、不時発見もたびたびあって、不分明な点が多い。また、昨年度は石切丁場跡が関わる大規模調査が2件も重なり、芦屋市の発掘調査体制の主力がその二つの現場に注がれることになった。本書はそのうちの成果の一つを報じた1冊であるが、内外の多くの関係者と事業者からのご協力で何とか記録保存の証しが世に残せたものと思う。いま全体を振り返って、不十分ながらこの調査記録が発信し得たこと、課題となっていたことを簡潔に記し、締め括りとした。

明らかにし得たことの第一点は、石切丁場跡の遺存形態が実にさまざまであり、その立地条件には、石の持ち出し、石曳きに関わるルートや船出し場、母岩（転石）の産状、丁場の経営主体、供給要請石材の多寡など多角的なことがらと深く結びついていたことである。その点は、他の日常親しみのある集落遺跡や古墳の調査や保護以上に難しい側面があり、点的な石切丁場跡が一概にどの場所にはあり、どの場所には存在しないといった区分けは非常に難しいということを痛感した。石切丁場の個々の遺構の確認には、広く表土を剥いで、花崗岩巨礫の分布や加工の兆候を的確かつ早期に把握することが最も有効であり、幅の狭いトレンチによる調査方式が他の埋蔵文化財同様に利点があったわけでは決してない。この点は今後の調査方法を開拓するにあたって教訓とすべきことからであり、遺跡の性質に応じた発掘調査法の工夫がさらに模索されなければならない。

第二点は、石垣材として目的視された調整石の基本形態については、今回の調査を通じて、基礎から再考すべきであろう。これまで理想と考えられてきた180~200cm長の規格的な直方体の調整石は、ほとんどなく、石材の割石工程もきわめて多様であって、石垣の角石や角脇石とは異なって、大量の築石が知恵と工夫で求められたように考えられた。各種の採石パターンは個性にあふれた丁場類型とも不可分な関係を保ち、小面が最も重視される基本石材たる築石の確保は、大阪城近隣の採石場である東六甲の石切丁場では最優先のものであったと考えられる。当調査地点では、端石が多く、確認された矢穴痕を有する石材のおよそ7~8割がその兆候を示すものであり、おそらくそれは使用石材搬出の効率の良さを表したものであったろう。築石とは第36図にも圖解しているように、けして整齊な直方体ではなく、小面の平石面を底面とした長四角錐形の石材であり、この種形態の



第147図 江戸時代の新田開発の面影を残す調査地の古い写真(1) (北西から) [藤川祐作氏撮影・提供]



第148図 江戸時代の新田開発の面影を残す調査地の古い写真(2) (南西から) [藤川祐作氏撮影・提供]



第149図 調査地近傍でみつかった矢穴痕のみられる石
[岩本昌三氏撮影・提供]

ものは、既に呉川遺跡や宮川西藏町遺跡など、浜出しによる海上運搬を前提とした船出し関連の遺跡で良好な実例が数多くみつかっており、船積み段階でどの程度まで精加工が進んでいたかが判明する。こうした石材こそ最も数多く必要とされた調整石の実態であり、その前段を示す準調整石のレベルでは、直方体精加工の調整石よりも多くの数が既に検出されている。東六甲採石場の中には、奥山刻印群や一部の岩ヶ平刻印群で、角石や角礫石の調達を目的とした精度の高い石切りも行われていたことは容認できるが、この地域一帯の採石場の基本的なねらいが大量の需要のみられる榮石の確保にあったことは十分予想されてよく、場ごとの石材供給目的も考える必要が出てきたのである。

第三点目として、刻印明示による石切丁場の経営主体の表現が岩ヶ平刻印群南端部にあっても貫徹していた蓋然性が高まっているといえる。2点検出した通称「雁」の刻印は、石切丁場では、領域同伴刻印での検討、大坂城では石垣削替請における散在状態からの分析の一、二、三を示したが、百歩譲って考えても、これまで確認してきた藩別の丁場割〔古川2003〕との因果関係は存在するようであり、今後のより一層の検討が待たれよう。

第四点目は、六甲花崗岩の研究成果〔先山2001a～d・2003〕に則して、本丁場跡の花崗岩の産状を客観的にみれたこと、とくに本書ではその結果を開陳する機会をもたなかつたけれど、先山徹氏が滲磁率に関しての調査も一部実施しており、その特性の一端の解明の糸口は得られている。段丘端に立地する本地点での花崗岩転石のありかたは、他の調査地点と比較する上にも有効であり、既述した選択された母岩の特徴からもその一端はうかがえよう。

第五点目は、徳川大坂城との工期3工程との関連や、それを指揮した尼崎藩主戸田氏鉄が領有していた揖津国菟原郡～武庫郡に本採石場が広く分布することがどのように各調査場所に反映しているかである。この点については、3期区分される徳川大坂城再築過程、とりわけ石垣構築の工程が石切丁場の個別利用の問題となり、その相関関係をときほぐすことは容易ではない。しかし、現在大阪城の石垣には3期の工

程が丁場割絵図や史料から明らかにされており、例えば、寛永5年の第3期工事の代表をなす築造場所は、大手門土橋から玉造口土橋へと続くいわゆる「南外堀」であり、堀幅が数10 mから120 m前後に及んで累々と続く高石垣は圧巻である。高石垣の実高は、五番櫓跡付近の石垣最上部でみつかっている刻印「十五間」「十七間」の存在から類推すれば、1間 = 6尺5寸の計算で約33.5 mを測り、水面上約22 m、水面下に11.5 mの配分となる。その用材は石面方2尺～3尺の築石を主体とし、出角は整加工材による算木積みの技法を用いている。花崗岩の均質度も高く、第1期工事で築かれた二の丸西・北・東の3面の石垣と比較して、石材自体の大きさ、加工具合、石積み法、角石の大きさと精緻度、全体的な曲面性など、その差違は著しく〔渡辺1989〕、10年の短期のうちに石垣構築技術の大なる進化があったと言わねばなるまい。

そうした変化の一端は、当然3期全部と関わりのある東六甲採石場に何らかの形で反映されてよく、どの工期の丁場であったのかを常々考える視点は不可欠である。併せて自然石主体の豊臣期大坂城の石材採取場がどう重



第150図 宮川河口遺跡出土毛利家刻印石A



第151図 宮川河口遺跡出土毛利家刻印石B



第152図 宮川河口遺跡出土毛利家刻印石C



第153図 刻印石A拡大



第154図 刻印石B拡大



第155図 刻印石C拡大

複していたのか、していないのか。江戸時代を通じての大坂城自体の修築石材はどのように供給していたのか。近傍の尼崎城の石垣用材とはどういう関わりを有していたのかなど、石切丁場の重層性をめぐるもうろろの疑問はより一層深まったといえる。

本書で試みた矢穴の型式分類や比較、法量の測定、基本データの開示、傾向などの分析はまだまだ粗雑なものであり、求められるべきことがらも少ないけれど、矢穴痕跡しかない加工材の一つにも文化財として歴史を語らせる位置に昇格させるには、怠ってはいけない作業の一部と考えられる。以下の課題として、石材加工の手順、石材運搬路、複数の海出し場の解明、作業別の労働編成、刻印の意味づけなどがあり、今後はますますの文献史料の支援も望まれる。

近世城郭の研究に比べ、石切場の調査や研究は、文献史学・建築学・城郭史・史跡整備・考古学・民俗学・土木工学など多方面と関わりつつ調査と保存の両面で取り組みが遅れているといって過言ではない（森岡 2003）。まずは消滅する前の精度の高い発掘調査を励行し、将来展望として石切場の原風景を市民の遺産として面的に残していく保護姿勢が必要である。大坂城という世界有数の構築物と直接関係する史跡としての認識に立った施策が急がれよう。城郭研究や近世土木史研究に占める石切丁場調査の歴史的意義は計りしだく大きく、今後は各地の生産遺跡との比較考証を積極的に推し進めなければならない。行政調査にも民間調査にも限界がある。多くの分野の研究団体や調査組織と積極的に連携し、保存と活用を射程に入れた調査活動が欲せられる。盛んとなってきた芦屋市民の学習活動にも期待するところが大きいのである。

（森岡）

遺跡調査をめぐる動きの記録（抄録）

- ・芦屋市教育委員会文化財課 発信 岩崎総合設計株式会社 宛（平成16年2月27日付）「株式会社タチバナ様の埋蔵文化財確認調査について」
- ・芦屋市教育委員会文化財課 作成（平成16年3月1日付）「芦屋市岩園町5番地他24等地の埋蔵文化財発掘届出に関する工事着手経過について」
- ・岡西文化財保存協議会 日本考古学協会会員 伊井孝哉・勇正廣 発信 芦屋市長 山中健 宛（平成16年3月2日付）「要望書 告知遺跡である『八十塚古墳群』・『人坂城石垣採石場』遺跡地に於ける開発行為に対する事前調査について」
- ・芦屋市教育長藤原周三 発信 ウエスト・ハウス株式会社代表取締役西畠博史 宛（芦教文第290号、平成16年3月3日付）「芦屋市岩園町5番地他24等地の埋蔵文化財状況検証の実施について」
- ・神戸新聞（2004年3月5日朝刊）芦屋の「八十塚」調査受け古墳群造成 大阪の業者一部損壊の可能性
- ・朝日新聞（2004年3月6日朝刊）芦屋、八十塚古墳群内の宅地開発 満喰前に出土工事 市教委指導 工事を中止 業者「法違反 認識ない」
- ・芦屋市教育委員会（平成16年3月15日付）「芦屋市岩園町5番地他24等地所在 八十塚古墳群・徳川大坂城東六甲採石場 埋蔵文化財包蔵地工事損壊状況の結果」提出・送付
- ・神戸新聞（2004年3月27日朝刊）大坂城再建時 石材搬送ルート解明 刻印石を市文化財に 芦屋市が軒内初
- ・朝日新聞（2004年3月28日）大坂城再建毫毛別家跡立石 芦屋市文化財に指定 採石場特定期の決め手
- ・毎日新聞（2004年3月28日朝刊）芦屋の宅地開発予定地 大坂城跡の採石場跡確定 調査待たず業者上盛り 崩落危険で防災工事優先 日本考古学協会「本格調査」
- ・文化財保存全国協議会 代表委員田中義明 代表委員十斐敬武 発信 芦屋市教育長藤原周三・芦屋市長山中健・兵庫県教育委員会委員長武田政義・兵庫県知事井口敏三・文化庁長官河合恒雄 宛（平成16年4月4日付）「芦屋市八十塚古墳群及び徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める要望書」
- ・日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会委員長近藤英夫 発信 文化庁長官河合恒雄・兵庫県知事井口敏三・兵庫県教育委員会委員長武田政義・芦屋市長山中健・芦屋市教育長藤原周三 宛（平成16年4月19日付）「芦屋市八十塚古墳群及び徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める要望書」
- ・朝日新聞（2004年4月9日朝刊）芦屋・八十塚古墳群内の宅地造成問題「法の理念踏みにじる」考古学協会 保存要望書提出へ
- ・岩園町埋蔵文化財包蔵地 阪神県民局西宮土木出張所の現地視察（平成16年4月15日）
- ・日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会委員長近藤英夫 発信 文庫県教育委員会委員長 武田政義 宛（裡文委第1号、平成16年4月19日付）「芦屋市八・九・十塚古墳群及び徳川大坂城東六甲採石場等の調査、保存に関する要望について」
- ・日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会委員長近藤英夫 発信 芦屋市教育委員会委員長 藤原周三 宛（裡文委第1号、平成16年4月19日付）「芦屋市八・九・十塚古墳群及び徳川大坂城東六甲採石場等の調査、保存に関する要望について」
- ・兵庫県立芦屋市八十塚古墳群・大坂城の危機 「企画ニュース」No.166（2004年4月20日発刊）文化財保存全国協議会
- ・兵庫県阪神東九条長野村正路 発信 ウエスト・ハウス株式会社代表取締役西畠博史 宛（第1013号、平成16年4月21日付）「宅地造成及び開発行為に関する工事に伴う防災措置について（通知）」
- ・朝日新聞（2004年4月22日朝刊）八十塚古墳群・宅地造成工事 調査求めて要望書 考古学協会・市教委に提出
- ・神戸新聞（2004年4月22日朝刊）芦屋・八十塚古墳群の宅地開発 墓原回復など求める 日本考古学協会が要望書
- ・シンポジウム実行委員会 発信 芦屋市教育委員会文化財課長 宛（2004年5月6日付）「芦屋市八十塚古墳群・徳川大坂城東六甲採石場を考えるシンポジウム」（開催趣意書）
- ・ウエスト・ハウス㈱（仮称）芦屋市岩園町宅地造成事業 防災工事施工計画書受理（平成16年5月14日）
- ・朝日新聞（2004年5月14日朝刊）救出人作戦 宅地開発 サワガニに危機
- ・大阪歴史学会代表委員芝井篤彦 発信 芦屋市教育長藤原周三 宛（2004年5月17日付）「芦屋市八十塚古墳群・徳川大坂城東六甲採石場の調査と保存を求める要望書」
- ・朝日新聞（2004年5月28日）芦屋の遺跡 調査前造成 考古学協会が視察
- ・神戸新聞（2004年5月28日）芦屋八十塚古墳群内の宅地開発問題 重要遺跡 十分調査を 考古学協会 採石場を視察し指摘
- ・産経新聞（2004年5月28日）考古学研究者ら 開発現場を視察 芦屋・岩園

- ・毎日新聞（2004年6月1日朝刊）芦屋市教委 大坂城の採石場跡確認一部地城、本格調査へ
- ・芦屋市教育委員会（平成16年6月7日付）「兵庫県芦屋市岩園町5番地他24筆 瑞蔵文化財包蔵地確認調査（A地区）実績報告書」兵庫県教育委員会提出、送付。
- ・芦屋市教育委員会文化財課 発信 各位 実（平成16年6月15日付）「徳川大坂城東六甲採石場跡発掘調査現地見学・検討日のご案内」
- ・2004年6月17日県議会文教常任委員会「芦屋市岩園大坂城採石跡保存について 県会議員つづき研二の議会質問の報告『大坂城の見える大坂城再開拓石場』史跡公園として保存を」と提案
- ・毎日新聞（2004年6月21日朝刊）芦屋 八十塚古墳群シンボ 大坂城跡時の採石場見学 各人名家の刻印も観察
- ・読売新聞（2004年6月21日朝刊）芦屋 八十塚古墳群の保存シンボ 参加者「十分調査を」
- ・芦屋市教育委員会（2004年6月28日）「徳川大坂城東六甲採石場 現地説明会ノート—岩ヶ平石切丁場跡—」発刊。研究者現地検討見学会にて配布。
- ・神戸新聞（2004年7月1日朝刊）大坂城再築城 大坂城採石場跡を確認 芦屋市教委4日説明会 岩瀬、六斎荘町で
- ・毎日新聞（2004年7月2日夕刊）推進文化行政の問題点浮き彫りに 芦屋市の大坂城石垣採石場跡調査
- ・毎日新聞（2004年7月7日朝刊）芦屋の「東六甲採石場跡」「廻川運搬ルート存か」家紋入り刻印石發掘 大坂城再築時に利用
- ・芦屋市教育委員会（平成16年7月23日付）「兵庫県芦屋市岩園町5番地他24筆 瑞蔵文化財包蔵地確認調査（B地区）実績報告書」兵庫県教育委員会提出、送付。
- ・「新しいタイプの乱開発と遺跡調査問題 芦屋市の八十塚古墳群と徳川大坂城採石跡」『全文協ニュース』No.167（平成16年7月23日発行）文化財保存全国協議会
- ・芦屋市教育委員会（平成16年7月29日付）「兵庫県芦屋市岩園町5番地他24筆 瑞蔵文化財包蔵地確認調査（D地区）実績報告書」兵庫県教育委員会提出、送付。
- ・産経新聞（2004年8月13日夕刊）《カタログ4 モダン関西》東六甲採石場跡 大坂城の巨石 その運搬の謎 等集記事
- ・文化財保存全国協議会 萩野豊・関西文化財保存協議会伊井孝雄 発信 芦屋市教育委員会教育長藤原周三 宛（平成16年8月18日付）「要望書『東六甲徳川大坂城採石場』保存について」
- ・文化庁岡田調査官の芦屋市岩園町における発掘調査現場視察について（指導日：平成16年8月19日）
- ・朝日新聞（2004年8月21日）芦屋の大坂城採石場遺跡 市民ら「史跡公園に」保存求め、あす講演会
- ・徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める市民の会代表南畠秀樹 発信 兵庫県教育委員会教育委員長並川明子 宛（平成16年8月26日付）徳川大坂城跡岩屋採石場の調査と保存についての質問と要求
- ・朝日新聞（2004年8月27日朝刊）芦屋・横尾・複数車両、芦屋に大坂城石垣の採石場 世界遺産になる可能性も
- ・神戸新聞（2004年8月27日朝刊）採石場跡を史跡公園に 大坂城再築時の名残くさび穴次らず 大名家の刻印花こう岩百数十点 芦屋市民らが保存会 著名活動を開始 29日見学会ア
- ・朝日新聞（2004年8月28日朝刊）芦屋・八坂城採石場遺跡 保存求める公開質問状 知事と県教委に「市民の会」
- ・毎日新聞（2004年8月30日朝刊）大坂城再築の石材運搬 「当時の苦労」を思う 芦屋 見学ツアーに市民ら80人
- ・神戸新聞（2004年8月31日朝刊）芦屋の採石場跡 調査や保存で貴重状を提出 県などに市民の会
- ・兵庫県教育委員会教育委員長並川明子 発信 徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める市民の会代表南畠秀樹 宛（教文第1967号、平成16年8月31日付）「徳川大坂城東六甲採石場の調査と保存についての質問と要求について」
- ・日本考古学会埋蔵文化財保護対策委員会委員長近藤英夫 発信 芦屋市教育委員会委員長藤原周三 宛（埋文委第14号、平成16年9月1日付）「芦屋市徳川大坂城東六甲採石場の調査・保存に関する再要望について」
- ・芦屋市教育委員会（平成16年9月2日付）「兵庫県芦屋市岩園町5番地他24筆 瑞蔵文化財包蔵地調査経過報告」
- ・芦屋市文化財保護審議会（報告会）の要旨（平成16年9月2日）
- ・兵庫県教育長 発信 芦屋市教育長 宛（教文第1994号、平成16年9月6日付）「芦屋市岩園町5番地他に係る発掘調査結果について（依頼）」
- ・芦屋市教育長 藤原周三 発信 日本書古學協会埋蔵文化財保護対策委員会委員長近藤英夫 宛（芦教文第167号、平成16年9月21日付）「芦屋市徳川大坂城東六甲採石場等の調査・保存に関する再要望について（回答）」
- ・芦屋市教育委員会（平成16年9月30日付）「兵庫県芦屋市岩園町5番地他24筆 瑞蔵文化財包蔵地確認調査（C地区）（E地区）実績報告書」兵庫県教育委員会に提出、送付。
- ・大阪歴史学会代表委員会久保水道男 発信 文化庁長官河合隼雄、兵庫県知事井戸敏三、兵庫県教育委員会委員長武出政義、芦屋市長山中健、芦屋市教育長藤原周三 宛（平成16年10月12日付）「芦屋市徳川大坂城東六甲採石場『岩ヶ平石切丁場跡』の調査と保存を求める要望書」
- ・関西文化財保存協議会代表 荏野豊 発信 芦屋市教育委員会教育長藤原周三 宛（平成16年10月20日付）「徳川大坂城東六甲採石場『岩ヶ平石切丁場跡』の発掘調査に関する公開質問状」
- ・兵庫県教育長 発信 芦屋市教育長 宛（教文第2438号、平成16年10月22日付）「芦屋市岩園町5番地他に係る発掘調査結果とその取扱い等について（依頼）」
- ・芦屋市教育長 藤原周三 発信 兵庫県教育長 宛（芦教文第191号、平成16年10月25日付）「芦屋市岩園町5番地他に係る発掘調査結果とその取扱い等について（回答）」
- ・芦屋市教育長 藤原周三 発信 関西文化財保存協議会代表 荏野豊 宛（芦教文第193号、平成16年10月27日付）「徳川大坂城東六甲採石場『岩ヶ平石切丁場跡』の発掘調査に関する質問について（回答）」
- ・芦屋市教育長 藤原周三 発信 ウエスト・ハウス株式会社代表取締役 西畠博史 宛（芦教文第198号、平成16年10月29日付）「芦屋市岩園町5番地他での埋蔵文化財調査について」
- ・兵庫県教育長 発信 芦屋市教育長 宛（教文第2470号、平成16年10月29日付）「芦屋市岩園町5番地他24筆の八十塚古墳群・岩ヶ平刻印群の発掘調査について（通知）」
- ・関西文化財保存協議会 荏野豊・伊井孝雄 発信 芦屋市教育委員会教育長藤原周三 宛（平成16年11月1日付）「徳川大坂城採石場跡調査に関する要望」
- ・赤旗（2004年11月1日付）再建大坂城石垣の供給地 芦屋市岩ヶ平跡現地説明会、ツアーア、H.P開設 多彩な催しで広がる世論 遺跡開発から守れ過去ひもとき未来へ手わたす
- ・赤旗（2004年11月25日付）「新聞・文化」徳川大坂城の石垣採石場跡 芦屋市岩ヶ平調査・保存の意味 兵庫 荏野豊執筆
- ・徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める市民の会代表南畠秀樹 発信 兵庫県知事井戸敏三 宛（平成17年1月28日付）「発掘調査をひろく芦屋市民に説明してください（要頼書）」
- ・徳川大坂城東六甲採石場の保存を求める市民の会代表南畠秀樹 発信 芦屋市長山中健 宛（平成17年1月28日付）「発掘調査成果をひろく芦屋市民全員に説明してください（要頼書）」
- ・刻印石等の移設保存に関する確認書（平成17年3月28日付締結）
- ・芦屋市教育長藤原周三 発信 芦屋警察署長 宛 芦教生第59号、（平成17年5月25日付）「埋蔵物発見届」返付

引用・参考文献

- 相生市教育委員会 1986 「感状山城跡第一次発掘調査概報」
- 青手木正・中村光大 1996 「尼崎城跡と幕府派遣の新城奉行たち」『地域史研究』第25巻第2号(通巻74号) 尼崎市立地域研究史料館
- 我妻仁 2000 「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」『宮城考古学』第2号 宮城考古学会
- 秋山高志・林英夫・前村松大・三浦圭一・森杉大 兵昭 1981 「因縁山城址生活史事典」 柏書房
- 朝尾直弘 1963 「『御庭政略』『岩波講述日本歴史』9巻 近世1 岩波書店
- 芦の芽グループ 1973 「石造文化財」『芦の芽資料叢書第4集』
- 芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会・刻印調査研究会 編 1968~73 『刻印石調査資料』1~32号(青網) 芦の芽グループ
- 芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会 編 1969 「昭和43年度芦屋市文化財パトロール調査報告 芦屋及び西宮の刻印石調査資料(芦の芽資料叢書第2集) (孔版) 芦の芽グループ
- 芦の芽グループ文化財問題研究会 1972 「D地区」『刻印資料』30号(孔版)
- 芦屋市 1971 「新修芦屋市史」本編
- 芦屋市教育委員会 2001a 「『古樹展示説明会資料』『寺宇刻印石と芦屋廃寺跡-第75地点発掘調査の成果から-』」
- 芦屋市教育委員会 2001b 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第40集>
- 芦屋市教育委員会 2004 「徳川大坂城東六甲採石場現地説明会ノート-岩ヶ平切丁場跡-」(2004.6.28, 7.4実施) 現地説明会配布資料
- 芦屋市教育委員会 編 1997 「観覧の手びき 最新発見! 考古学からみた芦屋城 -95~97歳災復興調査の成果-」
- 芦屋市広報課 2000 「芦屋2000年、土中からのプレゼント-考古学からみた芦屋城-10選-毛利氏とともに縁深き芦屋の採石場、巨石に刻まれた初めての名人刻印」『広報あしや』第802号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2002a 「21世紀 古代史発掘in芦屋-平成13年度埋蔵文化財調査のあらまし-」『広報あしや』第837号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2002b 「教育のページ 市内埋蔵文化財調査の状況-埋蔵文化財の保護と発掘調査にご協力を-」『広報あしや』第840号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2002c 「刻印石の解く-発掘調査からわかる大坂城と芦屋の歴史-」『広報あしや』第855号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2004 「土中からのメッセージ-市堀内の大坂城毛利家採石場出土刻印石を市文化財に指定しました』『広報あしや』第891号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2005a 「発掘・発見メモリアル2004-熊川大坂城東六甲採石場の大規模調査終る 長州藩毛利家の石切丁場跡を確認 岩国町では石材を持ち出すルートなどがみつかる」『広報あしや』第908号 芦屋市
- 芦屋市広報課 2005b 「土中からのメッセージ-芦屋考古学再発見8 六甲花崗岩と大坂城の礎石」『広報あしや』第915号 芦屋市
- 芦屋市立美術博物館 1991 「芦屋市立美術博物館利用案内」
- 芦屋市立美術博物館 編 1991a 「時を結ぶ」『館内リーフレット』 芦屋市立美術博物館
- 芦屋市立美術博物館 編 1991b 「時を結ぶ」『要覧』 芦屋市立美術博物館
- 芦屋市立美術博物館 編 1991c 「オープン展示・モニュメント」『芦屋の歴史と文化財-歴史資料展示室常設展示回顧-』 芦屋市立美術博物館
- 東信男 2004 「丸亀城の石垣普請と採石地」『第9回中国四国中城館調査検討会-中四国の城郭にみる石垣普請-』 第9回中四国中城館調査検討会
- 東靖子 1994 「『連報』鈴鹿遺跡の試掘調査」『のじぎく文化財だより』第33号 諸のじぎく文化財保護研究会
- 尼崎市 1996 「尼崎城史事典」(尼崎市立地域研究史料叢編)
- 尼崎市地域史料館 1996 「尼崎藩築」『尼崎地域史事典』 尼崎市
- 有坂隆道・村川弘吉 1971 「大坂城と芦屋」『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 栗野万喜三 1974 「但馬竹田城の石垣について」 間西城郭研究会
- 伊井孝雄 2004a 「兵庫県芦屋市八十塚古墳群 破壊の危機」『文全協ニュース』No.166 文化財保存全国協議会
- 伊井孝雄 2004b 「新しいタイプの乱開発と遺跡調査問題」 芦屋市の八十塚古墳群と徳川大坂城採石遺跡』『文全協ニュース』No.167 文化財保存全国協議会
- 池上裕子 2002 「日本の歴史 第15巻 織田信長と江戸幕府」 講談社
- 池田頼 1998 「花岡岩屋裏の世界」 古文書院
- 生駒山地領家帯研究グループ 1999 「第二章 1 生駒山の謎」『大地のおいたち-神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』 葉地書館
- 勇正広・藤岡弘 1976 「古墳時代」『新修 芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 勇正広・藤岡弘・前田義人・古川久雄 1978 「苦楽園の古墳」<西宮市文化財調査報告第2集> 西宮市教育委員会
- 石川県教育委員会・御石川郡埋蔵文化財センター・金沢城・城下町学際研究プロジェクト 2001 「金沢城フォーラム『いま甦る金沢城』金沢城の歴史と魅力を探る」
- 石川県教育委員会 文化財課全沢城研究調査室 2004 「平成16年度金沢城埋蔵文化財確認調査 現地説明会資料」
- 石川県教育委員会 文化財課金沢城研究調査室 2005 「石垣の匠と技」
- 石川県教育委員会 文化財課金沢城研究調査室 御石川郡埋蔵文化財センター 2003 「平成16年度金沢城跡いもり堀埋蔵文化財確認調査 岐原跡地埋蔵文化財確認調査 現地説明会資料」
- 石川県教育委員会 文化財課金沢城研究調査室 2004 「平成16年度金沢城跡いもり堀、堂形(県庁跡地)埋蔵文化財確認調査の概要 現地説明会資料」
- 石川県教育委員会文化財課金沢城研究調査室 2003 「『空石切丁場の調査について』(資料)」
- 石川県教育委員会文化財課金沢城研究調査室 2004 「『平成16年度戸室石切丁場確認調査の概要-佐大池南』場跡A群-」
- 御石川郡埋蔵文化財センター 1998 「金沢城跡を掘る」
- 御石川郡埋蔵文化財センター 1999a 「金沢城跡を掘る」
- 御石川郡埋蔵文化財センター 1999b 「金沢城跡を掘る Vol.2」
- 御石川郡埋蔵文化財センター 2000 「金沢城跡を掘る」
- 板倉曾之 1996 「幕藩体制下における一城一城令」『皇學館史学』11号 皇學館大學
- 伊丹市教育委員会 1976 「伊丹城跡発掘調査報告書」
- 伊丹市教育委員会 1977 「伊丹城跡発掘調査報告書」
- 伊丹市教育委員会 1978 「伊丹城跡発掘調査報告書」

- 伊丹市教育委員会 1979 「伊丹城跡発掘調査報告書」
- 伊藤 信 1934 「戸田氏歴代公 大坂市役所
- 伊藤 康 2003 「仙台城石垣の石材調査」『石垣普請の風景を読む～城の石垣はいかにして築かれたか～』東北芸術工科大学
- 伊藤 いじ 1973 「城・基礎の技術と歴史－」 読売新聞社
- 岩崎二郎・田中晋作 1988 「阪南丘陵開発事業に伴うミノバ石切場跡－発掘調査報告書－」 財團法人大阪府埋蔵文化財協会
- 岩谷昌三・藤川祐作 1979 「第6章 声屋の史跡大阪城と採石地声屋の刻印石」『声屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』 声屋市教育委員会
- 魚澤翠五郎 編 1956 『芦屋市史』本篇 兵庫県芦屋市教育委員会
- 内田九州男 1977 「秀吉晩年の大阪城大工事について－慶長の三の丸工事と町中屋敷替－」『大阪城天守閣記要』第5号 大阪城天守閣
- 内田九州男 1980 「天守台築造年代を考える－元和八年（1622）か寛永元年（1624）か－」「觀光の大坂」No.346 大阪観光協会
- 内田九州男 1982 「徳川期大阪城再築工事の経過について」『大阪城の諸研究』（日本城郭史研究叢書8） 名著出版
- 内田九州男 1989 「豊臣秀吉の大阪建設」『よみがえる中世－2 本能寺から天下へ－大阪』 平凡社
- 内田九州男 2000 「大阪城研究の歩み」『大阪城と下町』（渡辺武蔵長追載記念論集刊行会編） 思文閣
- 内田九州男・渡辺 武・藤井重夫・中田博司・山元雅一 他 1997 「徳川時代大阪城外郭開闢石垣遺構調査報告－日本経済新聞大阪本社新社建設に伴う住吉大川河口付近淡路石垣遺構の調査」 徳川時代大阪城外郭開闢石垣遺構発掘調査会（難波宮址遺影会内）
- 内海町教育委員会 編 1979 「史跡 大阪城石垣石切場跡 保存管理計画報告書」
- 宇野俊一 他 編 1991 「日本全史」（ジャパン・クロニクル） 講談社
- 梅村直司 2004 「小倉城周辺切り石場遺跡」『研究紀要』第18号（側北九州市芸術文化振興財团埋蔵文化財調査室
- 江瀬 洋 2005a 「豊臣期大阪城と大阪冬の陣・大阪府警察本部地図の石垣をめぐって－」『大阪の歴史』第65号 大阪市史編纂室
- 江瀬 洋 2005b 「秀吉晩年の大阪城改造」『国際シンポジウム「韓国の倭城と大阪城」資料集』 倭城・大阪城国際シンポ実行委員会
- 江戸廻遊研究会 編 2001 「因説江戸考古学研究典」柏原房
- 遠山元男 1991 「ヴィジュアル史料 日本戦入史」第2巻 戦人の世紀（上） 雄山閣出版
- 大西正美 1987a 「近世初頭の“石工”と“石持”－役負担と身分をめぐって－」「歴史と神戸」140号 神戸史学会
- 大西正美 1987b 「大阪城採石に従事する秀吉の精鋭について」『蘿蔓』53号 声の芽グループ
- 大西正美 1992 「近世初期の城普請における接石－伊木三十郎・刻印石の意義をめぐめて－」「蘿蔓」65号 声の芽グループ
- 大西正美 2003 「9、文献にみる近世初頭の採石場の変遷と豊臣・徳川両大阪城」『徳川大阪城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書』芦屋市立鶴見水泳場高区配水池（水道建設）築造工事に伴う唐津藩採石場跡の発掘調査－』芦屋市文化財調査報告第44集』 芦屋市教育委員会
- 大阪観光協会 1987 「大阪城普請工事の解説」（監修 大阪城天守閣）
- 大阪市文化財協会 編 1985 「若別史跡大阪城跡－大阪城内外配水池改良工事に伴う発掘調査概報」（財）大阪市文化財協会
- 大阪城残石記念公園 2005 「石と壁のあるふる里」 土庄市教育委員会 大阪城残石記念公園管理事務所
- 大阪城天守閣 1967 「大阪城天守閣記要別冊 大阪城天守閣所蔵資料目録
- 大阪城天守閣 1984 「大阪城天守閣記要」第12号 <大阪城学術調査会報告特集号>
- 大阪城天守閣 1991 「天守復旧の百年記念特別企画 豊臣秀吉展」
- 大阪城天守閣 2002 「特別展 大阪再生～雄幕府の大阪城建築と都市の復興～」
- 大阪城天守閣 2005 「大阪城の歴史と半歳の大改修」 大阪城天守閣
- 大田秀春 2001 「文禄・慶長の役における日本の茶の茶城鏡の変遷について～朝鮮邑城の利用から倭城茶城への過程を中心に～」「朝鮮学報」181輯
- 大田秀春 2003 「倭城の石垣」「城と石垣－その保存と活用－」（岸峰純大・入間宣夫編） 高志書院
- 大田秀春 2005 「朝鮮の城壁と豊臣軍－織田大名の異文化遭遇－」「国際シンポジウム「韓国の倭城と大阪城」資料集」 倭城・大阪城国際シンポ実行委員会
- 大田秀春・高田 翁 2005 「文禄・慶長の役における日本軍の朝鮮城壁利用について～島津氏の事例を中心に～」「城館史科学」4号
- 人手前大学史学研究室文化財調査室 1990 「打出小遣道路の発掘調査」「いな」（文化財調査室だより）No.5
- 大畠 伸 監修 1970 「日本城郭事典」 秋山書店
- 大畠 伸・鳥羽正雄 1936 「日本城郭史」 雄山閣出版
- 岡崎二郎・飯塚康行 2004 「松江城の石垣と廃城」『第9回中四国中世城跡調査検討会－中四国の城郭にみる石垣普請－』 第9回中四国中世城跡調査検討会
- 岡本良一 1964 「夏の陣 四大阪崩城」「大阪冬の陣」 草思書房
- 岡本良一 1970 「大阪城」（岩波新書739） 岩波書店
- 岡本良一 1983 「大阪城」（岩波グラフィックス18） 岩波書店
- 岡本良一 編 1982 「大阪城の諸研究」名著出版
- 岡本良一 編 1983 「大阪城」 清文堂
- 岡山市教育委員会 1997 「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」
- 岡山市教育委員会 2001 「史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告」
- 奥田 尚 1979 「古代の石切場その1－岩脇幹西方－」「古代学研究」第91号 古代学研究会
- 奥田 尚 2000 「高野山石の石種と採石地について」「古代学研究」第150号 古代学研究会
- 奥田 尚 2002 「石の考古学」 学生社
- 奥田 尚・増田一裕 1979 「古代の石切場その1－岩屋町西方－」「古代学研究」第91号 古代学研究会
- 奥田 尚・増田一裕 1981 「古代の石切場その2－ミンズルボー付近－」「古代学研究」第95号 古代学研究会
- 小野 浩 1973 「大阪城全」（付・日本城郭史）<復刻> 名著出版
- 小和田哲男 1968 「一國一城令の不統一性」「城郭史研究」3号
- 小和田哲男 1973 「亂世の城跡と戦国群雄」「歴史読本」昭和48年9月号
- 小和田哲男 1995 「徳川名主屋城の誕生」「古屋城」 学習研究社
- 香川県教育委員会 1972 「埋蔵文化財包蔵地調査カード」（提供資料）
- 香川県教育委員会・香川県文化財保護協会 1978 「香川県の文化財地図」
- 香川県史跡名勝天然記念物調査会 1928 「香川県史跡名勝天然記念物調査報告」第三

- 香川県文化財保全協会 1986 「善川の文化財(市町編)」
- 学芸課 1990 「モニタメント「時を結ぶ」山根 勝 作」「なりひら」第1号 芦屋市立美術博物館
- 芦屋研究社 1989 「歴史像シリーズII 徳川家康・西海団への大武略」
- 笠谷と古比・黒田慶一 2000 「秀吉の野望と謀算 文様・慶長の役と岡ヶ原合戦」 文美堂
- 櫻原市教育委員会 2002 「桜山古墳」『櫻原市埋蔵文化財調査概報 平成13年度』
- 鷹原 勝 2001 「皿江戸の施設と遺構 2十村・土橋・石垣 石垣の名称と構造」『因説江戸考古学研究典』(江戸遺跡研究会編)
- 柏青房
- 加藤 隆 1969 「幕藩体制における大名家格制の研究」 近世日本城郭研究所
- 加藤 隆 1982 「幕藩体制の確立と城郭統制」『早稲田実業学校研究紀要』16号
- 加藤克郎 2004 「戸室右衛門丁場跡(キゴ山古オクノタケ丁場跡 キゴ山西丁場跡)」『平成15年度発掘調査報告書 よみがえる石川の遺跡』石川県教育委員会・財(石川)県埋蔵文化財センター
- 加藤理文 2004 「中世 戦国 江戸の城」 新人物往来社
- 葛野 春 2004 「『学問・文化』徳川大坂城の石垣採石場跡 芦屋市岩ヶ平 調査・保存の意味 兵庫」「赤旗」11月25日号 日本共産党
- 金沢市 1995
- 金沢城研究調査室 2003 「金沢城を櫻る -金沢城絵図について-」『金沢城調査研究パンフレット』No1 石川県教育委員会
- 金沢城研究調査室 2004a 「平成16年度『戸室右衛門丁場跡』『金沢城調査研究パンフレット』No2 石川県教育委員会文化財課
- 金沢城研究調査室 2004b 「金沢城を探る 逆襲の変遷について」『金沢城調査研究パンフレット』No2 石川県教育委員会
- 金沢城研究調査室 2004c 「金沢城城絵図の分類と編年 -金沢城絵図調査報告書-」『研究紀要 金沢城研究』第2号 石川県教育委員会事務局 文化財課金沢城研究調査室
- 金森安孝 2000a 「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」『日本歴史』第62号 日本国歴史学会
- 金森安孝 2000b 「仙台城委託記及び修復石垣」『月刊考古学ジャーナル』456号 ニュー・サイエンス社
- 金森安孝 2003a 「仙台城の石垣」「城と石垣 -その保存と活用-」(峰岸純夫・入間宣田主編) 高志書院
- 金森安孝 2003b 「石垣調査の語彙」「城と石垣 -その保存と活用-」(峰岸純夫・入間宣田大編) 高志書院
- 金子浩之・杉山安生 2003 「江戸城の石切丁場」「石垣普請の風景を読む -城の石垣はいかにして築かれたか-」東北芸術工科大学「友定の板碑 -近江八幡市友定-」「民俗文化」滋賀民俗学会
- 東康保明 1994 「日本考古学における型式学・物語物」「考古学雑誌』第82巻3号 日本考古学会
- 東康保明 1997 「第5章第2節 中世の石造物と石切技術」「応永高砂市所在竜山石切場 -竜山採石遺跡詳細分布調査報告書-」<高砂市文化財調査報告12> 高砂市教育委員会
- 神山 仁 1997 「江戸時代中期の城郭統治 -正保城塁囲と城郭修理願願団の成立について-」『城郭史研究』17号 日本城郭史学会
- 山川政太郎 1970 「日本石材工史」 稲葉会
- 川勝政太郎 1981 「新版 石造美術」 美文堂新光社
- 川野正雄 1974 「内海町史」 内海町
- 関西大学文学部考古学研究室 編 1983 「関西大学考古学研究室開設参拝周年記念考古学論集」
- 関西大学文学部考古学研究室 編 2002 「八十桜古墳郡の研究」<関西大学文学部考古学研究第7巻、芦屋市文化財調査報告第33集>
- 関西大学文学部考古学研究室
- 木越隆三 2003 「石垣普請の「労働組織」」「石垣普請の風景を読む -城の石垣はいかにして築かれたか-」東北芸術工科大学
- 木越隆三 2004 「元和~寛永期の金沢城築基について」『研究紀要 金沢城研究』第2号 石川県教育委員会事務局 文化財課金沢城研究調査室
- 木島孝之 2004 「整城技術の伝播と大名権力 -織田系城郭の「城間とその限界」「戦国の堅城 -堅城から読み解く戦略と戦術」 学習研究社
- 北畠聰一郎 1975 「近世城郭における石垣様式編年の一考察」『史泉』第50号 関西大学文学部史学科
- 北畠聰一郎 1981 「穴太の系譜と石材運搬」「日本城郭体系」別巻I 新人物往来社
- 北畠聰一郎 1987 「石垣普請」法政大学出版局
- 北畠聰一郎 1999 「伝統的石積み技術の成立とその変遷」『横原考古学研究所紀要考古学論叢』第22番(奈良県立横原考古学研究所編)
- 北畠聰一郎 2002a 「石を積むということ」「ストーン・サークル」第14号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2002b 「石垣につけること」「ストーン・サークル」第15号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2003a 「豊島・小豆島石切丁場、見学記」「ストーン・サークル」第16号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2003b 「住吉村の「映画石」について」「ストーン・サークル」第17号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2003c 「伝統技術からみた城郭石垣の複配について」「関西大学考古学研究室開設五十周年記念考古学論叢」 関西大学
- 北畠聰一郎 2003d 「石材加工技術とその用具」「古代近畿と物流の考古学」石野博信編 学生社
- 北畠聰一郎 2003e 「江戸城天守閣普請の原風景 -加賀前田藩の場合-」『研究紀要 金沢城研究』創刊号 石川県教育委員会事務局 文化財課金沢城研究調査室
- 北畠聰一郎 2003f 「秘伝書からみた石垣構築技術」「石垣普請の風景を読む -城の石垣はいかにして築かれたか-」東北芸術工科大学
- 北畠聰一郎 2004a 「石切」と馬鹿の石工」「ストーン・サークル」第18号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2004b 「修繕の復元によせて」「ストーン・サークル」第19号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2005a 「本物を指向する石垣修復工事とは」「ストーン・サークル」第20号 石の民俗資料館
- 北畠聰一郎 2005b 「第5章第3節 近世の石切技術」「兵庫県高砂市所在竜山石切場 -竜山採石遺跡詳細分布調査報告書-」<高砂市文化財調査報告12> 高砂市教育委員会
- 北畠聰一郎 2005c 「城郭普請と石垣の搬出入」「天下普請を支えた石材の調達 -東六甲徳川大坂城石切丁場跡-」現地検討会資料 主催: 大阪歴史学会 後援: 日本考古学協会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 北畠聰一郎 2005d 「堅城と石垣修築の発進」「大阪歴史学会 現地見学検討会 天下普請を支えた石材の調達 -東六甲徳川大坂城石切丁場跡-」 大阪歴史学会
- 北畠聰一郎 2005e 「水軒堤防の石積み技術について」「シンボジウム 県指定史跡水軒堤防を考える -その築造年代と今日の意義-」財団法人和歌山県文化財センター
- 北畠聰一郎・垂原清尚 ほか 2006 「竜山石切場 兵庫県高砂市所在 竜山採石遺跡詳細分布調査報告書」<高砂市文化財調査報告第12集> 高砂市教育委員会
- 北川 炎・跡部 信 1997 「鳥取県立博物館所蔵「池田家文庫」中の大坂城石垣関係史料について」「建設文化としての大坂城石垣造における

- る土木施工技術の土木史的調査研究』（課題番号07155206 平成7・8年度文部省科学研究（基盤研究(B)）研究成果報告書） 建設文化としての大坂城石垣構造に関する総合研究会【代表：大阪産業大学長（当時）天野光三】
- 北野博司 1999a 「『发掘余話』金沢城跡五十間戸出土「鐵劍」刻石その2～ジンザ登場」「石川県埋蔵文化財情報」第2号 須石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 1999b 「『发掘余話』金沢城跡五十間戸出土の「鐵劍」刻石」「石川県埋蔵文化財情報」創刊号（附）石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 2001a 「石垣の近と抜」『金沢城フォーラム』いまと見る金沢城—金沢城の歴史と魅力を探る— 石川県教育委員会
- 北野博司 2001b 「加州金沢城の石垣修繕について」東北芸術工科大学紀要第8号 東北芸術工科大学
- 北野博司 2003a 「金沢城石垣の変遷1」「研究紀要 金沢城研究」創刊号 石川県教育委員会事務局 文化財課金沢城研究調査室
- 北野博司 2003b 「石垣普請の風景」「石垣普請の風景を読む—城の石垣はいかにして築かれたか—」東北芸術工科大学
- 北野博司 2004 「金沢城石垣の変遷2—切石積石垣—」「研究紀要 金沢城研究」第2号 石川県教育委員会事務局 文化財課金沢城研究調査室
- 北山 勇 他 1975 「構内古墳現状・遺物報告」「岡西学院考古」No.2 岡西学院大学考古学研究会
- 城戸 久 1944a 「元和一國一城令と武家法度の城郭禁令に就て—江戸幕府の諸侯城郭に対する政策に就ての一考察、其の一—」「建築学会論文集」33号
- 城戸 久 1944b 「江戸時代における諸侯城郭の折衝と修繕に就て」「建築学会論文集」34号
- 城戸 久 1960 「江戸幕府の諸侯城郭に対する政策について」「日本城郭全集」2巻 日本城郭協会
- 城戸 久 1972 「伏見城の歴史について」「城と民衆」毎日新聞社
- 木戸雅寿 1996 「近年石垣事情—考古学的石垣研究をめざして—」「畿島城郭」第3号 織豊期城郭研究会
- 木戸雅寿 1997 「近年石垣事情—考古学的石垣研究を目指して—」「畿島城郭」第4号 織豊期城郭研究会
- 木戸雅寿 1999 「安土城が語る信長の考古学」「静岡考古学会
- 木戸雅寿 2002 「織豊期城郭の石垣」「10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望」<織豊期城郭研究会第10回研究会資料集> 織豊期城郭研究会
- 木戸雅寿 2005 「織田信長治下の城郭建築について—混池からの脱出のために—」「森 宏之君追憶城郭論集」織豊期城郭研究会「日本の歴史」第19巻 文明としての江戸システム 講談社
- 木村 碧 編 1974 「文献資料調査の実務」「地方史マニュアル2」柏書房
- 朽木史郎 1956 「篠山城」多文化顕彰会
- 朽木史郎 1960 「篠山城石垣符石の研究」篠山文庫
- 朽木史郎 1966 「篠山城」篠山町役場
- 朽木史郎 1977 「ひょうごの城」神戸新聞出版センター
- 紅葉芳雄 1940 「考古小綱」紅葉芳雄著 西宮市立歴史会編
- 黒田慶一 2004 「韓国での倭寇調査について」「韓国の倭寇と壬辰叛乱」岩田書院
- 黒田慶一 2005 「歴史的名辞としての大坂城「三の丸」「森 宏之君追憶城郭論集」織豊期城郭研究会
- 黒田慶一 編 2004 「倭寇の倭寇と壬辰叛乱」岩田書院
- 合田茂伸 1994 「特別展 八咫鏡発掘」西宮市立郷土資料館ニュース 第15号 西宮市立郷土資料館
- 鴻原正彦 1972 「洲本城」岡西城郭研究会
- 国宝史跡民俗博物館 編 「天下統一と城」展示図録
- 小林耕治 1993 「信長・秀吉主力の城郭政策」「東北学院大学論叢（歴史学・地理学）」第25号 東北学院大学
- 小林丈文・加藤茂広 1996 「六甲山地の地形・地質」「兵庫県南部地震における人と自然の博物館の活動」兵庫県立人と自然の博物館
- 小村良二 2001 「近畿の石垣（石灯）－竈山石－」「地質ニュース」557号(06-32)
- 小竹真直子 1996 「安土城の石垣・石垣に対する考古学的アプローチのための基礎作業－」「畿島城郭」第3号 織豊期城郭研究会
- 小松和博 1985 「江戸城—その歴史と構造—」名著出版
- 坂井尚登 2002 「倭城の石垣と木の手」「城郭史研究」22号 日本城郭史学会
- 坂本勝比古 1997 「郊外住宅地の形成—株式会社花六麓莊新幹地」「阪神間モダニズム—六甲山麓に開いた文化、明治末期～昭和15年の軌跡」淡交社
- 先山 健 2001a 「六甲の大地をつくるもの」「自然環境ウォッチャング「六甲山」」（兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ編）神戸新聞総合出版センター
- 先山 健 2001b 「マダマ滝までの化石「花崗岩」」「自然環境ウォッチャング「六甲山」」（兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ編）神戸新聞総合出版センター
- 先山 健 2001c 「石材の代名「あかげ石」」「自然環境ウォッチャング「六甲山」」（兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ編）神戸新聞総合出版センター
- 先山 健 2001d 「くずれやすい花崗岩」「自然環境ウォッチャング「六甲山」」（兵庫県立人と自然の博物館「六甲」研究グループ編）神戸新聞総合出版センター
- 先山 健 2003 「VI. 3. 六甲花崗岩の分類研究・特性からみた石垣用材」「徳山大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書」芦屋市六甲山花崗岩排水溝（水道施設）採石工事に伴う唐津落採石場跡の発掘調査－<芦屋市文化財調査報告書集> 芦屋市教育委員会
- 先山 健 2005a 「地質学・岩石学的にみた六甲山の御影石」「天下書譜を支えた石材の調達－東六甲徳山大坂城石切丁場跡－」現地検討会資料 主催：大阪歴史学会 後援：日本考古学協会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 先山 健 2005b 「近畿地方西部～中国地方東部における白亜紀～古第三紀火成岩類の帯状配列の検討と歴史学への適用－」「人と自然」No.15
- 先山 健 2005c 「第3章第1節 石器の名称」「兵庫県高砂市所在竈山石切場－竈山探石遺跡詳細分布調査報告書－」<高砂市文化財調査報告書12> 高砂市教委員会
- 先山 健 2005d 「第3章第3節 帯率率」「兵庫県高砂市所在竈山石切場－竈山探石遺跡詳細分布調査報告書－」<高砂市文化財調査報告書12> 高砂市教委員会
- 佐久間貴士 編 1989 「よみがえる中世」2－本願寺から天下へ－大坂－ 平凡社
- 難山城跡学術調査团 編 1980 「難山城大手馬出跡子座調査報告」「難山町教育委員会

- 藤山町教育委員会 1978 「史跡藤山城跡保有管理計画策定書」
- 藤山町役場 1969 「藤山城跡第一期修理完成記念誌」
- 讃岐石造物研究会（六車忠一・遠藤 真） 2002 「讃岐の礎岩探石遺跡」『香川県文化財保護協会 文化財協会報平成13年度特別号』
- 彦経新開館 2004 「東六甲探石跡－大坂城の巨石 その運搬の謎』<歴史ドラマランド>（2004年8月13日夕刊）
- 静岡県立登昌博物館 2005 「西条と家康」「平成17年度 春期企画展 むかしの西条」〔静岡市文化財収蔵資料展シリーズ4〕
- 高岡 勇 1979 「日本山石産業団会」 名著刊行会（復刻版）
- 島田 清 1952 「藤山城の助役諸侯について」 多紀郡友会
- 島田 清 1957 「明石城」
- 清水一文 2005a 「第4章第4節 近世の竈山開発」『兵庫県高砂市所在竈山石切場－竈山探石遺跡詳細分布調査報告書－』<高砂市文化財調査報告12> 高砂市教育委員会
- 清水一文 2005b 「第5章第4節 石用其」『兵庫県高砂市所在竈山石切場－竈山探石遺跡詳細分布調査報告書－』<高砂市文化財調査報告12> 高砂市教育委員会
- 清水精大 編 1995 「明治前半・昭和前期 神戸都市地図」 柏書房
- 志村 清 1970 「大坂城今昔」〔日本古城友の会編〕 日本古城資料出版会
- 小学館 1993 「日本歴史館〔全一巻〕」
- 小学館 1981 「近畿の城」
- 城郭談話会 1999 「義姫公の城郭遺跡 倭城の研究」第3号 特集：九大シンポの成果 付)金海竹島倭城、西生浦倭城
- 小豆島民俗資料館 2005 「館内リーフレット」 内海町立小豆島民俗資料館・内海町教育委員会
- 織豊期城郭研究会 編 2005 「10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望」 <織豊期城郭研究会資料集> 織豊期城郭研究会
- 白峰 勘 1984 「慶長・元和・寛永期の近畿圏における諸城倭城について」『紀尾井史学』4号 上智大学大学院史学科専攻院生会
- 白峰 勘 1995a 「元和・寛永期の公役普請について」『日本歴史』562号 吉川弘文館
- 白峰 勘 1995b 「織豊政期の城壁破却と元和・一國二城令」『年報中世史研究』20号
- 白峰 勘 1997a 「文禄・元和の見城普請について」『年報中世史研究』22号
- 白峰 勘 1997b 「江戸時代初期における幕府の城郭統制について」『城郭研究室年報』6号
- 白峰 勘 1998a 「慶長期の役普請による堅城(修築)」『日本近世城郭史の研究』 校倉書房
- 白峰 勘 1998b 「補論 近世初期の城普請にける法度」『日本近世城郭史の研究』 校倉書房
- 白峰 勘 1998c 「補論一 武家諸法度發布以降の支城修築」『日本近世城郭史の研究』 校倉書房
- 白峰 勘 1998d 「補論二 武家諸法度發布以降の新規堅城」『日本近世城郭史の研究』 校倉書房
- 杉本史子 1994 「四輪岡」『吉波講座日本通史』12巻 岩波書店
- 鈴木 啓 2003 「東北の城と石垣」『城と石垣－その保存と活用－』(峰岸純夫・入間宣大編) 高志書院
- 石造物研究会 2002 「二上山東京城(香芝市)の石切場について」『二上山凝灰岩の石切場と石造物』
- 千田憲博・他 共編著 1996 「城の語る日本史」 朝日新聞社
- 仙台市教育委員会文化財課 編 2000 「仙台城本丸跡の発掘」 仙台市教育委員会
- 創文社 1959a 「徳川禁令考」前集一
- 創文社 1959b 「徳川禁令考」前集四
- 孫 水種 1987 「韓国城郭の研究」 文化公報部文化財管理局
- 堆積学研究会 編 1998 「堆積学評議集」 胡倉書店
- 第2回全国城跡等石垣整備調査研究会実務局 編 2005 「城跡石垣」集成～第2回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集～
- 田岡香造 1971 「地名でわかる歴史－西宮市の事例」 民俗文化研究会
- 高木昭作 1975 「江戸幕府の成立」『吉波講座日本歴史』9巻 近世1 岩波書店
- 高木昭作 1988 「江戸幕府の成立」『日本歴史大系』3 山川出版社
- 高砂市教育委員会 2002 「竈山探石跡(調査概報)」
- 高田 健 2000 「日本側から見た神楽慶長の役時の朝鮮側城郭」『織豊城郭』7号
- 高田 健 2004 「繩張り回覧見地による大坂城の陣図屏風」『江戸城伝』91 城郭情報部
- 高橋 寿治 1999 「川と平野の地学 第四紀層・利根川と関東平野、淀川と大阪平野」 山海堂
- 高橋義久二 1990 「木津川河川敷の大坂城残石」『山城郷土資料館報』第8号：京都府立山城郷土資料館
- 高屋孝明 1992 「石きりの里り石城」『石の文化』No.2 竈山石の文化会
- 高柳光寿 1922 「史学雑誌」第33編第11号 東京大学文学部史学会
- 高柳光寿 1970 「元和一国一城令」『高柳光寿史学論文集(下)』 吉川弘文館
- 高柳光寿・竹内雅三 1974 「角川日本史辞典」(第二版) 角川書店
- 浅川重徳・熊谷業土・土田友信 1999a 「金沢城跡(本丸御殿跡区画)」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 浅川重徳・熊谷業土・土田友信 1999b 「金沢城跡(三の丸東側区画)」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 竹中靖一 1932 「六甲」 別文庫
- 竹村忠洋 2004 「矢穴石・削石からみた徳川人城東六甲探石場の探石工程と石割技術－回転削石法と平行削石法－」(2004年10月27日) 三条文化財学会会員会資料
- 竹村忠洋 編 2002 「若宮遺跡(第3・4・11・16・17・25・31・32・33・34地点)発掘調査概要報告書－若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果－」<芦屋市文化財調査報告第38集> 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋 編 2004 「津道跡(第198・222地点)発掘調査報告書－芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果－」<芦屋市文化財調査報告第55集> 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷朋世 2005a 「想定大坂城東六甲探石場・平割印群の発掘調査(1)－長州藩毛利家石切丁場における発掘調査の成果－」(2004年11月18日) 城郭談話会11月例会資料
- 竹村忠洋・白谷朋世 2005b 「徳川人城東六甲探石場の発掘調査と探石技術について」日本考古学協会第71回総会研究発表要旨 日本書学会
- 多田暢久 1994 「大坂城～豊臣・徳川二つの城の繩張り比較」『歴史読本』第39巻第3号 新人物往来社
- 田中 勇・松岡利郎 1996 「尼崎城」『尼崎地域史実』 尼崎市
- 田中哲郎 1999 「城の石垣と濠」〔日本の美術403〕 全文堂

- 田中哲郎 2003 「石垣修復における課題」『石垣音響の風景を読む—城の石垣はいかにして築かれたか—』東北芸術工科大学
- 田辺眞人・森岡秀人ほか 1979 「芦原の生活文化史—古跡と歴史をつなげて—」 兵庫県芦屋市教育委員会
- 谷川龍一 1982 「日本庶民史料集成 第三十三卷 鎌倉風俗図鑑」 三才書房
- 近石泰秋 1975 「小豆島去年御安置之石改帳」『瀬戸内』第3号
- 地元団体研究会大阪支部兵庫教諭グループ編 1994 「兵庫自然史ハイキング地図ガイド」 创元社
- 土田素月 2005 「金沢城跡埋蔵文化財調査会 計画実施報告書」「平成16年度発掘調査会 よみがえる石川の遺跡」 石川県教育委員会、(財)石川県埋蔵文化財センター
- 出宮徳尚・乗岡 実 ほか 1997 「史跡岡山城跡本丸中の段發掘調査報告」 岡山市教育委員会
- 出宮徳尚・乗岡 実 ほか 2001 「史跡岡山城跡本丸下の段發掘調査報告」 岡山市教育委員会
- 出洋洋文 2003 「甲府城の石垣」『城と石垣—その保存と活用—』(岸井純夫・入間出宣夫編) 高志書院
- 徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 1998 「徳島文理大学文学部共同研究 小豆島」 徳島文理大学
- 鳥居正雄 1962・63 「近世城郭史の研究」 日本城郭学会
- 鳥居正雄 1977 「城の歴史」 雄山閣出版
- 鳥居正雄 1982 「近世城郭史の研究(全)」 雄山閣出版
- 飛田義夫 2001 「江戸時代の城の石垣」『日本造園学会誌ランダムスケープ研究』vol.64 No.5
- 富田和気夫 2003 「金沢城の石切場」『石垣音響の風景を読む—城の石垣はいかにして築かれたか—』東北芸術工科大学
- 富田和気夫 2005 「地方城郭の石切場—金沢城戸室石切場—」『天下普請を支えた石材の調達—東六甲徳川大阪城石切場跡—』現地検討会資料・主催:大阪歴史学会 後援:日本考古学会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 富田和気夫・加藤克郎 2005 「『宝石切場』調査の概要」『研究紀要 金沢城研究』第3号 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室
- 中井 均 1990 「織豊系城郭の築期—石垣建物・瓦・石垣の出現—」『中世城郭研究論集』 新人物往来社
- 中井 均 1994 「織豊系城郭の特質について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
- 中井 均 1996 「安土城築城夜—主として寺院からみた石垣の系譜」『織豊城郭』第3号 織豊期城郭研究会
- 中井 均 1998 「織豊系城郭の成立要素—南九州を事例として—」『織豊城郭』第5号 織豊期城郭研究会
- 中井 均 2002a 「戦国の城から近世の城へ—石垣・瓦・天守から—」『「歴博フォーラム」天下統一と城』 塚書房
- 中井 均 2002b 「織豊期城郭の石垣建物」『10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望』<織豊期城郭研究会第10回研究会資料集> 織豊期城郭研究会
- 中井 均 2005 「関ヶ原合戦後の豪城ラッシュ」『国際シンポジウム「韓国の倭城と大坂城」資料集』 倭城・大坂城国際シンポ実行委員会
- 水井久美男 1996 「日本出土鉄製剣」 兵庫県埋蔵文化財調査会
- 水井久美男 編 1998 「近世の出土鉄刀・一分銘印版刀」 兵庫県埋蔵文化財調査会
- 中川和明 1988 「農臣殺戮の城普請・城作事について」『弘前大学国史研究』85号
- 中沢圭二・市川浩一郎・市原 実 編 1987 「日本の地質6 近畿地方」 共立出版
- 中西 審 1987 「朝鮮側史籍に見る能登—その考察と理解の実相一」『朝鮮学報』125輯
- 中野 等 1992 「太閤・關白並立の慶臣殺戮について」『歴史評論』507号
- 中野 哲 1994 「堀の石垣」『特別展 発掘された豪城跡—新出土品にみる城のようすとくらしー』 静岡市立登呂博物館
- 水原慶二 2000 「戦國時代」上・下 小学館
- 水原慶二 2002 「薦生する戦国の城と町」『「歴博フォーラム」天下統一と城』 塚書房
- 中村 弘 2002 「第6章 石切場周辺の微地形の石垣跡」「鬼瓦採石遺跡(調査概報)」 高砂市教育委員会
- 中村博司 1979 「岡山県邑久町牛窓町前島所在地 徳川氏坂石切場跡」『大阪城天守閣記念』第7号別冊 和昭52年度調査報告特集 大阪城天守閣(大阪市経済局)
- 中村博司 1997 「徳川期大坂城石垣造について」『建設文化としての大坂城石垣造における土木施工技術の土木史的研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究費(基盤研究(B))研究成果報告書) 建設文化としての大坂城石垣造に関する総合研究会(研究代表者 天野光三)
- 中村博司 2003 「第9章 花崗岩削り技術の誕生とその展開」『歴史遺産としての石造構造物の土木史的研究』(課題番号12450208 平成12・13・14年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書) 歴史遺産としての石造構造物の土木史的研究に関する研究会
- 中村博司 2004 「大阪城と石切場遺跡について」『第9回中四国中世城跡調査会・中四国の中の城にみる石垣替替』 第9回中四国中世城跡調査会開会式
- 中村博司 2005a 「天下普請—龍谷大坂城の石垣構築をめぐってー」『天下普請を支えた石材の調達—東六甲龍谷大坂城石切場跡ー』現地検討会資料・主催:大阪歴史学会 後援:日本考古学会・文化財保存全国協議会・関西文化財保存協議会・歴史資料ネットワーク
- 中村博司 2005b 「天下普請—龍谷大坂城の石垣構築についてー」『大阪歴史学会 現地見学検討会 天下普請を支えた材の調達—東六甲龍谷大坂城石切場跡ー』 大阪歴史学会
- 中村博司 2005c 「慶長3・4年の大阪城普請についてーいわゆる「三の丸」の築造をめぐってー」(大阪歴史学会考古部会3月例会発表資料、2005年3月20日 於:クレア大阪北)
- 中村博司・森 聰・立谷治之 1997 「岡山県邑久町牛窓町前島所における徳川期大坂城石切場跡の調査」『建設文化としての大坂城石垣造における土木施工技術の土木史的研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究費(基盤研究(B))研究成果報告書) 建設文化としての大坂城石垣造に関する総合研究会(代表:大阪産業大学学長(当時) 天野光三)
- 奈良県立橿原考古学研究所 編 1980 「香芝町穴山・穴山石切場遺跡 発掘調査概報」 第1分冊
- 新見賀實 1972 「『波瀬御本城』 日本古き城の会
- 西ヶ谷豊弘 1991 「戦国の城—目で見る豪城と戦略の全貌(上巻)」 学習研究社
- 西ヶ谷恭弘 1992a 「戦国の城—目で見る豪城と戦略の全貌(中巻)」 学習研究社
- 西ヶ谷恭弘 1992b 「戦国の城—目で見る豪城と戦略の全貌(下巻)」 学習研究社
- 西川卓志 2000 「八十九塁古墳群老松町支群3号墳の調査」「八十塁古墳群老松町支群4号墳の調査」『西宮市埋蔵文化財調査報告書』<西宮市文化財資料第44号> 西宮市教育委員会

- 西川卓志・合田茂伸 1991 「八十塙古墳群劍角支群第2分墳、第2次発掘調査報告」<西宮市文化財資料第34号> 西宮市教育委員会
- 西川卓志・合田茂伸 1994 「八十塙発掘～三十八年間にわたる群集墳発掘調査の成果～」(西宮市立郷土資料館第9回特別展展示案内図録) 西宮市立郷土資料館
- 西川裕亮・北畠和義 2005 「施設からみた韓国倭城」、「国際シンポジウム 韓国の倭城と大阪城－西四大名は倭城造築から何を学んだか？」 西宮市教育委員会編 1982 「西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」<文化財資料23号> 西宮市教育委員会
- 西宮市教育委員会編 2001 「西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 第七版（南部）」<西宮市文化財資料第45号> 西宮市教育委員会
- 日本考古学学会 2003 「城と石垣 全国シンポジウムによせて」「城と石垣－その保存と活用－」(峰岸純夫・人間田宣夫編)
- 日本古城友の会 2003 「発会40周年記念第48回例会 指津大坂城」(当日資料)
- 日本城郭資料館出版会 1970 「臣臣秀吉の居城（大阪城編）」
- 日本城郭資料館出版会 1971 「豊臣秀吉の居城（聚楽第・伏見城編）」
- 日本石材振興会 1956 「日本石材史」
- 野中和夫 2000 「豆州、大名工場に関する研究の一覧－伊東市域、東伊豆町域の石丁場群より－」「竹石掩二先生、荻田多郎先生還暦記念論文集」 竹石掩二・荻田多郎両先生の選舉を祝う会(日本大学文学部学芸員過程研究室)
- 衆岡 実 1998 「岡山城の石垣について」「畿内城郭」第5号 織田信長城郭研究会
- 衆岡 実 2002 「岡山城本丸石垣解体修理」「岡山市埋蔵文化財センター年報！」 岡山市教育委員会
- 衆岡 実 2004 「岡山城の石垣と探石地」「第9回中四国中世城郭調査検討会－中四国の城郭にみる石垣普請－」 第9回中四国中世城郭調査検討会
- 衆岡 実 2005a 「宇喜多・小早川の居城 岡山城」「国際シンポジウム「韓国の倭城と大阪城」資料集」 倭城・大阪城国際シンポ実行委員会
- 衆岡 実 2005b 「石垣の石普請と探石地－岡山県南の城郭を中心に－」「森 宏之君追悼城郭論集」 織田信長城郭研究会
- 萩原一青 1971 「指津尼崎城」 日本古城友の会
- 端 猛・三浦ゆかり 1999 「金城鉢形まいり福岡認証調査」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 (86石川県埋蔵文化財センター)
- 波多野 純 2003 「「姫城岡崩原」の世界」「石垣普請の風景を読む－城の石垣はいかにして築かれたか－」東北芸術工科大学
- 林 泉 稲 1984 海史研究会編 1976 「藤原性活字家譜集」
- 「海史事典」 秋田書店
- 兵庫県 1996a 「兵庫の地質－兵庫県地質図・同解説書地質編」 兵庫県土地質図編纂委員会
- 兵庫県 1996b 「兵庫の地質－兵庫県地質図・同解説書土木編」 兵庫県土地質図編纂委員会
- 兵庫県教育委員会 1960 「兵庫県文化財図録」
- 兵庫県教育委員会 1984 「明石城跡」
- 兵庫県教育委員会 1986 「明石城跡 II」
- 兵庫県 1988 「雄山城探石場」
- 兵庫県教育委員会 1993 「探石道場 I（高砂市）」
- 兵庫県教育委員会 2000a 「兵庫県道路地図－第1分冊（発掘調査の手引き・地名表）」
- 兵庫県教育委員会 2000b 「明石城跡 III」
- 平岡正宏 2004 「津山城の石垣普請と石切場」「第9回中四国中世城郭調査検討会－中四国の城郭にみる石垣普請－」 第9回中四国中世城郭調査検討会
- 広瀬浩志 2004 「宇和島城の石垣普請と探石地」「第9回中四国中世城郭調査検討会－中四国の城郭にみる石垣普請－」 第9回中四国中世城郭調査検討会
- 広山尚道 1982 「播州赤穂の城と町」 雄山閣出版
- 福島県石川町商工授課課・石川町立歴史民俗資料館 2005 「日本三大蛇の産地 石川の蛇物と岩石」
- 福士千鶴 1994 「元和の一城一城と諸國城壁」 「歴史と地理」472号 山川出版社
- 福出千鶴 1995 「十七世紀初期における城郭政策の展開－城壁の視点から－」「論集きんせい」17号 近世史研究会
- 藤井重夫 1967 「指津 大坂城－石垣のふるさと小豆島－」「城と陣屋」22号 日本城郭協会近畿支部研究会
- 藤井重夫 1969 「指津 大坂城－大阪城修築について」「城と陣屋」35号 日本古城友の会
- 藤井重夫 1970 「指津 大坂城」「城と陣屋」浪速社
- 藤井重夫 1977a 「大阪城石垣調査報告書 第一章 城郭史研究会
- 藤井重夫 1977b 「大阪城石垣に謳の三文字」「歴史読本」3月号 新人物往来社
- 藤井重夫 1981a 「他川製大坂城（一）」「福井レポート」No.8 福井製作所
- 藤井重夫 1981b 「他川製大坂城（二）」「福井レポート」No.9 福井製作所
- 藤井重夫 1981c 「他川製大坂城（三）」「福井レポート」No.10 福井製作所
- 藤井重夫 1982a 「大阪城石垣修復について」「大阪城の諸研究」(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
- 藤井重夫 1982b 「善臣大坂城の石垣」「大阪春秋社」34号 大阪春秋社
- 藤井重夫 1982c 「他川製大坂城（四）」「福井レポート」No.11 福井製作所
- 藤井重夫 1982d 「他川製大坂城（五）」「福井レポート」No.12 福井製作所
- 藤井重夫 1983 「指津大坂城（七）－生駒山系の石切工場について－」「城と陣屋」158号 日本古城友の会
- 藤井重夫 1984a 「指津大坂城（八）－主として瀬戸内六島・横石島の探石場跡調査報告」「城と陣屋」161号 日本古城友の会
- 藤井重夫 1984b 「大坂城 よもやま話（1）」「福井レポート」No.18 福井製作所
- 藤井重夫 1984c 「大坂城 よもやま話（2）」「福井レポート」No.19 福井製作所
- 藤井重夫 1984d 「大坂城 よもやま話（3）」「福井レポート」No.20 福井製作所
- 藤井重夫 1985a 「大坂城 よもやま話（4）」「福井レポート」No.21 福井製作所
- 藤井重夫 1985b 「大坂城 よもやま話（5）」「福井レポート」No.22 福井製作所
- 藤井重夫 1986a 「大坂城 よもやま話（6）」「福井レポート」No.23 福井製作所
- 藤井重夫 1986b 「指津大坂城（十一）－豐臣時代の大坂城石垣－」「城と陣屋」169号 日本古城友の会
- 藤井重夫 1989 「石からみた大阪城と城下町」「『みがえる中世』（2）－本願寺から天下へ－大阪」 平凡社
- 藤井重夫 1991 「加賀肥後守邸の印刷」「『織田』63号 西のグルーブ
- 藤井重夫 1994 「日大和川河口付近の徳川氏大阪城外郭開闢石垣について」「大阪市文化財論集」 財团法人大阪市文化財協会
- 藤井重夫 1998 「指津大坂城（14）－寛永元年 牟利家助役の動向」「城と陣屋」226号 日本古城友の会

- 藤井重夫 ほか 1977 「徳川時代大阪城外周連石垣調査報告」<日本経済新聞大阪本社新社屋建設にともなう旧大和川河口付近岸壁石垣遺構の調査> 徳川時代大阪城外周連石垣調査報告編集委員会
- 藤井謙治 1985 「第二章 墓碑体系の確立 第一部 墓府領と大名領」『大阪府史』第5巻 大阪府
- 藤井謙治 1990 「大名城郭印鑄許可制について」[人文学報] 66号 京都大学人文科学研究所
- 藤井祐介 1976 「山石器・繩文時代」『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所
- 藤井祐介・森岡秀人 1974 「朝日ヶ正純文遺跡・今下山遺跡」<芦屋市文化財調査報告第8集> 芦屋市教育委員会
- 藤岡 弘 1985 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第19・27・30号墳」[兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度] 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘 1986 「八十塚古墳群岩ヶ平支群(22号墳)」[兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度] 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘 1987 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第2号墳」[兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度] 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘、佐々木幸雄 1967 「芦屋市内古墳分布調査所」[八十塚古墳群調査報告]「芦屋市文化財調査報告第5集」芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1969 「大阪城基石と芦屋」[芦の手] 16号 声の芽グループ(孔版)
- 藤川祐作 1972 「摂津大坂城(六) -芦屋山中の採石場-」<城と陣屋65号> 日本古城友の会
- 藤川祐作 1974a 「室津港内から引き揚げられた角石2石」[わだら] 12号 わだら編集部(孔版)
- 藤川祐作 1974b 「落石」[芦の手] 26号 声の芽グループ(孔版)
- 藤川祐作 1976 「八十剝印群の復元-徳川大阪城の研究3」「わだら」12号 わだら編集部(孔版)
- 藤川祐作 1979 「採石場としての岩ヶ平」[兵庫県埋蔵文化財調査年報]第4集 兵庫県教育委員会
- 藤川祐作 1980a 「奥山剝印群」「芦屋市埋蔵文化財道路分布地図及び地名表(第1分冊)」<芦屋市文化財調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1980b 「東六甲採石場甲山剝印群」地区調査報告「古形猿の呼び-芦屋文化」4 芸術史学会
- 藤川祐作 1982 「徳川大阪城・東六甲採石場」[西宮市所] <兵庫県埋蔵文化財道路分布地図及び地名表> 西宮市教育委員会
- 藤川祐作 1985a 「摂津大坂城(十) -徳川大阪城東六甲採石場甲山剝印群-」「城と陣屋シリーズ」168 日本古城友の会
- 藤川祐作 1985b 「徳川大阪城・東六甲採石場の廻廻の再考」「『東上史料室だより』8夏-ゆり号 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1985c 「大阪城と採石場」「鹿鳴」111号 加古川史学会
- 藤川祐作 1985d 「徳川大阪城東六甲採石場・甲山剝印群」「摂津大坂城10」日本古城友の会
- 藤川祐作 1988 「「武庫郡城」にみられる大阪城石材についての記載の再検討」「歴史研究手帖」2 神戸歴史研究会(神戸灘江生活文化史料館内)
- 藤川祐作 1989 「踏みメモ 潤・東灘区で見られる石工名のある石造物」「歴史研究手帳」11 神戸市灘江生活文化史料館
- 藤川祐作 1990 「西宮市と甲子園の分離剝印について」「『櫻』第61号 声の芽グループ
- 藤川祐作 1991a 「六甲山系の徳川大阪城採石場と積み出し地-芦屋市兵川町発見の新資料を中心に-」「歴史と神戸」第168号 神戸史学会
- 藤川祐作 1991b 「すていしょん ちぬ(10月21日)」「蘆櫻」62号 声の芽グループ
- 藤川祐作 1991c 「芦屋市内で見られる石工名のある石造物」「古形猿の呼び」10 芸術史学会
- 藤川祐作 1992 「芦屋市内で見られる石工名のある石造物-補足資料「荒石 石工」について-」「歴史研究手帖」24 神戸市灘江生活文化史料館
- 藤川祐作 1997 「千刈採石場」「市史研究紀要たからづか」第13号 宝塚市教育委員会
- 藤川祐作 1998 「年表・石工・石造遺物・穴矢-」「川彌の巣」5 芸術史学会
- 藤川祐作 2005 「穴矢の分量について」(三条整理事務所資料)資料2005.6.15]
- 藤川祐作・重川忠廣・望月 浩 1992 「芦屋墓園整備拡張に係る埋蔵文化財調査実績報告」 声の芽グループ
- 藤川祐作・重川忠廣・望月 浩 1993 「芦屋墓園整備拡張に係る第2次埋蔵文化財調査実績報告」 声の芽グループ
- 藤沢斉彦 1959 「日本の城と歴史」は子育会
- 藤田和夫・笠間太郎 1965 「西宮市およびその周辺の地質-西宮市2万5千分の1地質図説明書」 西宮市
- 藤田和夫・笠間太郎 1971 「六甲山地とその周辺の地質-神戸市および隣接地域地質図(5万分の1)説明書」 神戸市企画局
- 藤田和夫・笠間太郎 1982 「大阪西端地域の地質」(地域地質研究報告5万分の1図幅) 通商産業省工業技術院地質調査所
- 藤田和夫・笠間太郎 1983 「神戸地域の地質」(地域地質研究報告5万分の1図幅) 通商産業省工業技術院地質調査所
- 藤田和夫・笠間太郎・粉川昭平・市原 実 1959 「西宮東方の地質構造」[西宮市史] 第1巻 西宮市
- 藤原清尚 2005a 「第2章第2節 電石山の歴史」「兵庫県高砂市所在電石山切場-電石山採石跡詳細分布調査報告書-」<高砂市文化財調査報告書12> 高砂市教育委員会
- 藤原清尚 2005b 「第4章 第1節 電石山切場の形態とその石材の取り方」「電石山切場-電石山採石跡詳細分布調査報告書-」<高砂市文化財調査報告書12> 高砂市教育委員会
- 藤原清尚 2005c 「第4章第2節 砖切場の分布」「兵庫県高砂市所在電石山切場-電石山採石跡詳細分布調査報告書-」<高砂市文化財調査報告書12> 高砂市教育委員会
- 古市景一 1993 「自然観察ガイドブック② 声の自然Ⅱ-山地の自然-」 芦屋市
- 古川久雄 1970 「文化遺跡調査研究会 剃印調査経過報告(119~28)」「芦の手」No.20 声の芽グループ
- 古川久雄 1988 「徳川大阪城の採石場」「芦屋市埋蔵文化財分布地図・利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1992 「岩ヶ平剝印群における他国家等領主老人名剝印の発見」「蘆櫻」65号 声の芽グループ
- 古川久雄 1993 「徳川大阪城東六甲採石場-調査研究25年の歩みと課題-」(考古学研究会関西例会第65回研究会発表資料) 考古学研究会
- 古川久雄 1998 「奥山剝印群K地区における毛利氏所用剝印の分布と意義」「徳川大阪城東六甲採石場-芦屋郡園整備工事に伴う奥山剝印群K地区内の歩みと課題-」<芦屋市文化財調査報告31集> 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2003 「岩ヶ平剝印群における採石大名と採石領域」「徳川大阪城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平剝印群(第12次) 撫岡調査報告書-芦屋市六甲駒在水莊場區高砂池(水道施設)築造工事に伴う芦屋市埋蔵文化財調査-」<芦屋市文化財調査報告第44集> 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 2004 「徳川大阪城と東六甲採石場」「第9回中四国中世城査調査検討会-中四国の中城にみる石垣苔青-」 第9回中四国中世城査調査検討会
- 古川久雄 編 1999 「兵庫県芦屋市・西宮市所」 岩ヶ平剝印群 剃印石資料集 摂羅文化財調査研究所

- 古川久雄・森岡秀人 2001 「岩ヶ平刻印群 第11次(国光邸)発掘調査実績報告書」
- 古川久雄・森岡秀人 2002 「芦屋市立芦屋淨水場高区排水池(水道施設)築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書 - 滋川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第12次調査の概要-」
- 古川久雄・森岡秀人・濱野浩一 ほか 2003 「滋川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書 - 芦屋市立芦屋淨水場高区排水池(水道施設)築造工事に伴う府津瀬採石場跡の発掘調査-」<芦屋市文化財調査報告第44集> 芦屋市教育委員会
- 古田 昇 2005 「第Ⅲ章 潟戸内海における扇状地性平野 第1節 小豆島内海沿岸平野」「平野の環境歴史学」 古今書院
- 保阪 亨 1994 「伏見城の盃をめぐって」「文選」3号 京都教育大学歴史・地理学研究会
- 星野敏二 1978 「伏見城」「月刊文化財」8月号 第一法規出版株式会社
- 細川道草 1963 「芦屋郷上記」 芦屋史談会
- 堀口健次 1987 「巨渕島4番島の石垣」「倭城の研究」刊行号 城郭談話会
- 堀口健次 1988 「雁天城の石垣」「倭城の研究」第2号 城郭談話会
- 堀口健次 1989 「金海竹鳥居倭城の遺構・遺物、石垣」「西生浦倭城の遺構・遺物、石垣」「倭城の研究」第3号 城郭談話会
- 堀口健次 1999 「倭城の石垣 -資料化と分類の試み-」「倭城 -城郭遺跡が語る朝鮮出兵の実像-」(資料集) 倭城研究シンポジウム実行委員会
- 堀口健次 2000 「南海倭城の石垣」「倭城の研究」第4号 城郭談話会
- 堀口健次 2002 「熊川倭城の石垣」「明洞倭城の石垣」「倭城の研究」第5号 城郭談話会
- 堀口健次 2005 「倭城の石垣 -追石造撲とその技術を中心-」『国際シンポジウム 韓国の倭城と大坂城 -西国大名は倭城建造から何を学んだか?』
- 坂崎嘉明 1984 「幕府創立期における城普請について」尾藤正英先生追憶記念会報「日本近世史論叢」上巻 吉川弘文館
- 前田航二郎 1972 「但馬竹出城」 日本古城友の会
- 前田 昇 1971 「第一章 芦屋の自然環境」「新修芦屋史」本編 芦屋市役所
- 前田保夫 1979 「六甲の断層をさぐる」「神戸の自然1」 神戸市立教育研究所
- 前田保夫 1989 「六甲山はどうしてできたか」「(神戸の自然21)」 神戸市立教育研究所
- 松尾信裕 1988 「大坂城三の丸に見つかった防衛施設」「薪火」15号
- 松尾信裕 1994 「豊臣期大坂城の規模と構造-発掘調査から推定される豊臣期大坂城三ノ丸の範囲-」「大阪市文化財論集」(財)大阪市文化財協会
- 松尾信裕 2003 「戰国時代の大坂城 -寺内町から城下町へ-」「戰国時代の考古学」 高志書院
- 松尾信裕 2005 「豊臣期大坂城下町の成立と展開」「ヒストリア」第193号 大阪歴史学会
- 松尾収人 1994 「『逃災』呂川城跡の試掘調査(1)」「(のじぎく文化財だより)第30号(財)のじぎく文化財保護研究財團
- 松尾洋平 2005 「鬼ノ城における石材加工度について」「(津波)」第12号 古代山城研究会
- 松尾良隆 1987 「織豊期の『城わり』について」「横田健一先生古稀記念文化史論叢(下)」創元社
- 松岡利和 1988 「大坂城の歴史と構造」名著出版
- 松岡利郎 1996a 「尼崎城下」「尼崎地域史事典」 尼崎市
- 松岡利郎 1996b 「尼崎城下」「尼崎地域史事典」 尼崎市
- 松下 浩 1996 「穴太橋の再検討 -北畠鶴一郎氏の議論によって-」「織豊城跡」第3号 織豊期城郭研究会
- 松田直朗 2005 「四大名城の城跡と倭城」「国際シンポジウム「我が国の倭城と大坂城」資料集」 倭城・大坂城国際シンポジウム実行委員会
- 三浦正幸 2005 「石垣を築く -石垣の発展」「城のつくり方図典」 小学館
- 水林 麒 1987 「封建制の再編 -日本の社会の確立」 山川出版社
- 峰岸純夫 2003 「城郭保存・整備の現状と問題点」「城と石垣 -その保存と活用-」(峰岸純夫・入間田宣夫編) 高志書院
- 三宅正弘 1997 「花園岩と石垣りなすランドスケープ 白砂青松・赤松・御影石の石垣」「阪神間モダニズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期~昭和15年の軌跡」「(阪神間モダニズム)実展実行委員会編者」 洋文社
- 宮上茂隆 1984 「大坂城 天下の「名城」」草思社
- 宮武正登 2003 「名脇城と諸大名陣跡の石垣」「城と石垣 -その保存と活用-」(峰岸純夫・入間田宣夫編) 高志書院
- 三好 伸 ほか 1986 「感動やわから豆島」(社)小豆島観光協会
- 美和信夫 1991 「江戸幕府職制の基礎的研究」 広池園出版部
- 武藤 誠・村川行弘 1971 「考古学からみた芦屋」「新修 芦屋史」本編 芦屋市役所
- 村川行弘 1959 「芦屋八塚古墳調査報紙」<芦屋市文化財調査報告 第1集> 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1962 「大坂城と芦屋」「芦屋市文化財調査報告第2集> 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966a 「朝日ヶ丘先上器遺跡、朝日ヶ丘横文前期單孔道路、朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群」<芦屋市文化財調査報告 第4集> 芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966b 「苦楽園五番町古墳」(文化財資料3) 西宮市教育委員会
- 村川行弘 1970 「大坂城の謎」 学生社
- 村川行弘 1971 「考古学上からみた芦屋」「新修芦屋史」本編 芦屋市役所
- 村川行弘 2002 「大坂城の謎」<改訂新版> 学生社
- 村川行弘・石野博信 1964 「会下山遺跡」<芦屋市文化財調査報告 第3集> 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 「神捕・会下山遺跡」 明新社
- 村川行弘・森岡秀人 1970 「弥生時代」「新修芦屋史」資料篇1 芦屋市役所
- 村川修三 2002 「中世城郭の諸格」「(歴傳フォーラム)天下統一土城」 埼玉県
- 村山陽明 1984 「大坂城」の地盤調査と地下石垣の発見」「大坂城天守閣紀要」第12号 <大阪城学術調査報告特集号> 大阪城天守閣
- 卒礼町教育委員会 1998 「重要な形民俗文化財 半札・庵治の石工用具」
- 宝生村教育委員会 1980 「向坊古墳」
- 宝生野秀 2003 「史跡盛岡城跡の石垣修復」「城と石垣 -その保存と活用-」(峰岸純夫・入間田宣夫編) 高志書院
- 母利美和 1995 「慶長期の幕府普請による倭城」「彦根城」 学習研究社
- 森 治成 1912 「小豆郡略史」